

浅川扇状地遺跡群

YOSHIDA - FURUYASHIKI SITE

吉田古屋敷遺跡

北長野駅前B-1地区市街地再開発事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997. 3

長野市教育委員会

序

平成5年3月、「高速道路」長野自動車道・上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事でありました。また1998年長野冬季オリンピックは来シーズンと押し迫り、開催に向けての施設建設や従来停滞していた道路整備などともなう工事もほぼ終了し、長野市の景観も大きく変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求める陰に地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております吉田古屋敷遺跡は、飯綱山を水源とする浅川が形成した扇状地上に立地している、広大な面積を有する浅川扇状地遺跡群に属しており、長野市を代表する遺跡であります。再開発事業の性格上、今回の調査範囲は比較的狭いものでありましたが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第84集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連続と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました北長野駅前B-1地区市街地再開発組合の理事長はじめ事務局の皆様、工事を請け負われた北野・清水・守谷建設共同企業体の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成9年3月

長野市教育委員会
教育長 滝澤 忠男

例 言

- 1 本書は、長野市吉田における開発事業「北長野駅前B-1地区市街地再開発事業」にともない、平成7年度に発掘調査を実施し、平成8年度に整理調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 北長野駅前B-1地区市街地再開発組合 理事長 渡辺久夫 と受託者 長野市長 塚田佐 との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市吉田3丁目22番地34号他であり、開発事業の総面積は約1ha、建築敷地面積7,530㎡、建築面積4,640㎡、うち埋蔵文化財の保護対象面積は800㎡、発掘調査面積は750㎡である。
- 4 当初、遺跡名称を周知の埋蔵文化財包蔵地名である「信濃吉田駅遺跡」としたが、整理調査の段階で古字名を採用して「吉田古屋敷遺跡」に変更した。したがって吉田古屋敷遺跡は、本文第2図に示した古字名「古屋敷」を範囲とし、従前の信濃吉田駅遺跡の大部分と辰巳池遺跡の一部を含むものとする。
- 5 現場における発掘調査は、矢口の指導の下飯島が担当し、小野が補助した。整理調査は千野が統括し、各調査員、作業員が下記のとおり作業を分担した。

整理作業	土器・その他実測	千野、風間、中殿、山田、西澤、小野、清水、鳥羽、飯島
	石器実測・浄書	多羅沢
	遺物浄書・写真	千野、飯島
- 6 本書の編集・執筆は、第IV章を除き、飯島が担当した。
- 7 本書の第IV章は、綿田弘実氏（長野県立歴史館考古資料課専門主事）より玉稿を賜った。
- 8 綿田氏には、縄文時代の遺構・遺物に関する諸情報のみならず、効率的な整理方法など種々多大なご指導を賜ったにもかかわらず、本書には活かしきれなかった点があまりに多い。本書における遺物出土状況などの未整備、事実誤認などのすべての責は、現場主任かつ編集担当飯島に帰する。
- 9 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、「AYF1」と表記してある。ただし、当初遺跡名が信濃吉田駅遺跡であったために、一部の遺物には「ASYB」と記されたままのものも存在する。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 調査区の概要については、各地区毎に第三章第1節において概述した。また検出した遺構と出土遺物の詳細については、第三章第2～8節において時代別及び遺構別に記述し、遺構の測量図と写真、遺物の実測図と写真を挿入した。ただし縄文時代後期の土器群に関しては、第IV章の綿田氏の考察に詳しいため、第三章第8節では記述していない。
- 2 本調査において確認したすべての遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできうるかぎり追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。
- 3 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査区における座標北からの真北方向角は約9°55'であり、また磁北は真北より西へ約6°40'の偏差がある。
- 4 遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値と、日本水準原点の標高を基準とし、榊写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。
現場にて1/20の縮尺で基本原因を作成し、本書では基本的に1/80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況微細図等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。
- 5 検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を基に、本遺跡に対応させて仮に下記のとおりに作成した。
SA…竪穴住居跡、SB…掘立柱建物跡、SC…環状溝跡、SD…溝跡・河川跡、SE…井戸跡、
SH…柵・杭列、SJ…土塚墓、SK…土坑、SP…小穴、SX…性格不明遺構、Tr…トレンチ
- 6 遺物に関しては原寸にて実測図を作成した。一部の縄文時代土器については綿田氏にも実測およびトレースの労を賜った。したがって特に縄文施文の表記方法については実測者による個人差が生じたが、あえて統一・修正していない。本書では基本的に土器実測図1/4、土器拓影1/3、石器1/1、金属製品1/3等に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。
- 7 各遺物の出土層位は、遺物番号に付記してある。無記のものは覆土・埋土からの出土である。
- 8 本書紙数の都合上、遺物観察表を掲載できなかった。
- 9 挿入した遺物写真の縮尺は任意である。
- 10 住居跡等の遺構実測図や土器・石器等の遺物実測図において、焼土・炭化物等の範囲や土器の種類、黒色処理・赤色塗彩等の区別は網掛けによって下記のとおり表記した。



… 縄文・弥生土器



… 須恵器
赤色塗彩



… 焼土の範囲
灰釉陶器



… 陶磁器



… 内黒処理



… 炭化物の範囲

目 次

序 文、例 言、凡 例、目 次

第 I 章 調査経過	1
第 1 節 調査に至る経過	1
1 開発事業の概要	2
2 埋蔵文化財保護協議	
第 2 節 調査日誌抄	3
第 3 節 調査体制	4
第 II 章 吉田古屋敷遺跡周辺の環境	5
第 1 節 調査地の位置と地形	5
第 2 節 吉田地区の発掘調査歴	6
第 III 章 調査成果	8
第 1 節 調査の方法と概要	8
1 調査区の設定	2
2 試掘調査時の基本土層	3
3 各調査区の概要	
第 2 節 中世の遺構と遺物	13
1 溝跡 (SD 1、12)	
第 3 節 奈良時代の遺構と遺物	15
1 竪穴住居跡 (SA 3)	
第 4 節 古墳時代後期後半の遺構と遺物	18
1 竪穴住居跡 (SA 5・6)	
第 5 節 古墳時代後期前半の遺構と遺物	21
1 竪穴住居跡 (SA 1、2、4・11、7、12)	
第 6 節 弥生時代後期の遺構と遺物	29
1 竪穴住居跡 (SA 10)	2
2 木棺墓跡 (SJ 1)	
第 7 節 弥生時代中期の遺構と遺物	35
1 竪穴住居跡 (SA 8、9)	2
2 環状溝跡 (SC 1)	
第 8 節 縄文時代後期の遺構と遺物	41
1 敷石住居跡 (SA 13)	2
2 環列土坑群	3
3 集石土坑 (SJ 2・SK 2・SD 2)	
4 土坑 (SK 5、8、24、27、SP 20、その他)	5
5 溝跡 (SD 10)	6
6 A 区検出面	7
7 その他の石器	
第 IV 章 考 察	60
第 1 節 縄文土器について	60
第 2 節 敷石住居 SA 13 について	62

挿 図 目 次

第1図	吉田古敷遺跡位置図	2	第30図	SA 10出土土器実測図	30
第2図	調査地付近の字界図	5	第31図	SA 10出土遺物実測図	31
第3図	吉田地区の発掘調査地点	7	第32図	SJ 1実測図	32
第4図	調査区位置図	8	第33図	SJ 1出土遺物実測図	34
第5図	試掘調査時の基本土層柱状図	9	第34図	SA 8実測図	35
第6図	吉田古屋敷遺跡 遺構分布図	11 12	第35図	SA 8出土土器実測図	36
第7図	SD 1実測図	13	第36図	SA 8出土遺物実測図	37
第8図	SD 1出土遺物実測図	14	第37図	SA 9実測図	39
第9図	SD 12出土遺物実測図	14	第38図	SA 9出土遺物実測図	39
第10図	SA 3実測図	15	第39図	SC 1実測図	40
第11図	SA 3カマド実測図	16	第40図	SC 1出土土器実測図	40
第12図	SA 3出土遺物実測図	16	第41図	SA 13実測図	41
第13図	SA 3出土土器実測図	17	第42図	SA 13敷板想定図	42
第14図	SA 5・6実測図	19	第43図	SA 13出土土器実測図	43
第15図	SA 5出土土器実測図	20	第44図	SA 13出土遺物実測図	44
第16図	SA 6出土土器実測図	20	第45図	SA 13出土土器拓影	45
第17図	SA 1実測図	21	第46図	環列土坑群実測図	46
第18図	SA 1出土遺物実測図	22	第47図	SJ 2・SK 2 実測図	47
第19図	SA 2実測図	23	第48図	SJ 2出土遺物実測図	48
第20図	SA 2カマド実測図	24	第49図	SK 2・SD 2 出土遺物実測図	49
第21図	SA 2出土土器実測図	25	第50図	SK 2出土土器拓影	50
第22図	SA 4 11実測図	25	第51図	SD 2出土土器拓影	51
第23図	SA 4出土土器実測図	25	第52図	A区土坑実測図	52
第24図	SA 7実測図	26	第53図	土坑出土遺物実測図	53
第25図	SA 7出土土器実測図	26	第54図	土坑出土遺物実測図	54
第26図	SA 1 2実測図	27	第55図	その他の土坑出土土器拓影	55
第27図	SA 12出土土器実測図	27	第56図	SD 10出土遺物実測図	56
第28図	SA 12出土土器実測図	28	第57図	A区検出面出土遺物実測図	57
第29図	SA 10実測図	29	第58図	その他の遺構出土土器実測図	59

写真目次

写真1	A区重機による表土剥ぎ	3	写真36	SJ1北西から	32
写真2	A区調査風景	3	写真37	SJ1周辺の状況 北西から	33
写真3	大型建設機械の迫る中...	3	写真38	SJ1床面 南東から	33
写真4	B区1次面調査風景	3	写真39	SJ1棺材痕 北東から	33
写真5	A区西側 西から	10	写真40	SJ1棺材痕 南西から	33
写真6	A区西側 東から	10	写真41	SJ1完掘 南東から	33
写真7	A区東側 南西から	10	写真42	SJ1遺物出土状況	34
写真8	A区東側 東から	10	写真43	SJ1出土遺物	34
写真9	B区1次面 東から	10	写真44	SA8北から	35
写真10	B区1次面 西から	10	写真45	SA8出土遺物	38
写真11	B区2次面 東から	10	写真46	SA9西から	38
写真12	B区2次面 西から	10	写真47	SA9出土土器	39
写真13	SD1北から	13	写真48	SC1北から	40
写真14	SA3南東から	15	写真49	SA13南西から	41
写真15	SA3カマド	16	写真50	SA13北東から	42
写真16	SA3カマド完掘	16	写真51	SA13北西から	42
写真17	銅製丸柄	16	写真52	SA13炉 南西から	42
写真18	SA3出土土器	17	写真53	SA13炉半割	42
写真19	SA5・6北東から	18	写真54	SA13出土土器	46
写真20	SA5・6北西から	18	写真55	環列土坑群 北から	46
写真21	平瓶出土状況	18	写真56	SJ2北東から	47
写真22	SA6出土土器	19	写真57	SJ2集石 東から	47
写真23	SA1南東から	22	写真58	SJ2出土土器	49
写真24	SA2南東から	23	写真59	SD2出土遺物	51
写真25	SA2カマド	24	写真60	土坑出土土器	54
写真26	SA2カマド内部	24	写真61	土坑出土土器	55
写真27	支脚に転用された土器	24	写真62	SD10出土遺物	56
写真28	SA4北西から	26	写真63	検出面出土土偶	57
写真29	SA7出土土器	26	写真64	石鏃	58
写真30	SA12北西から	27	写真65	石錘	58
写真31	SA12出土土器	28	写真66	打製石斧	58
写真32	SA10北東から	30	写真67	磨製石斧	58
写真33	SA10南東から	30	写真68	石製品	58
写真34	SA10出土土器	31	写真69	凹石	58
写真35	SA10出土石器	31			

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経過

1 開発事業の概要

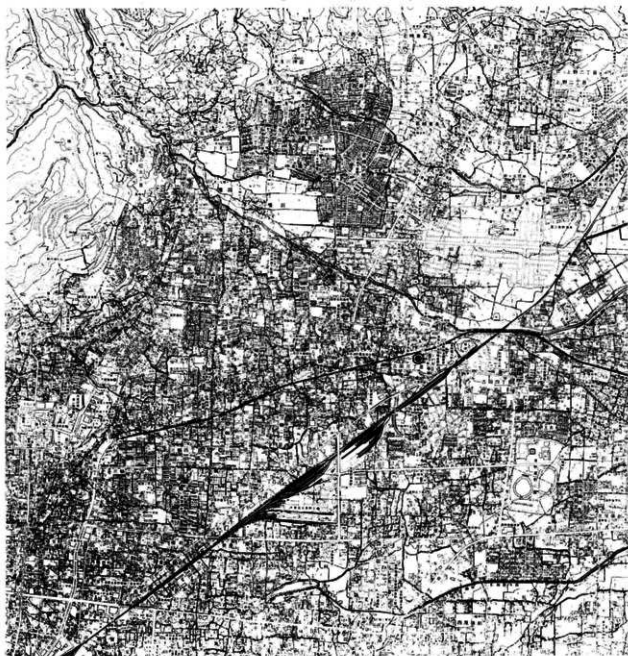
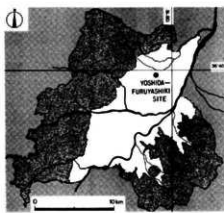
調査地となった長野市吉田地区、とりわけ北長野駅前地区は、市内北東部地域の生活拠点となるべき潜在的な基盤を備えた地区である。地区内には J R 信越本線北長野駅と長野電鉄信濃吉田駅があり、J R 長野駅までは直線距離で約 4 km、長野電鉄での所要時間は約 10 分間である。こうした恵まれた交通環境にあるにもかかわらず、これまでは十分な公共施設がなく、また低層の非耐火建築物の工業施設、倉庫、住居併用店舗等が混在した土地利用がなされていた。そこで防災機能、土地機能上健全な土地利用を図るべく市街地再開発事業が計画されたのである。これまでは北長野駅前 B-3 地区として、商業核を中心とした整備が平成 2 年に完了し、現在では東急ライフが営業している。そして計画中の長野電鉄信濃吉田駅橋上駅舎化および南北通路の受皿として、駅前広場としての整備を図るとともに、計画的な複合施設を建設することにより適切な街区の形成、土地利用の合理的かつ健全な高度利用と不燃化を促進するため、仁科工業の工場跡地に約 1 ha の B-1 地区の再開発事業がスタートしたのである。正式名称は「都市計画事業北長野駅前 B 1 地区第一種市街地再開発事業」といい、地区南側 B-3 地区との境に幅 6 m（一部 12m）の区画道路を新設し、駅前広場を整備し、公益施設・事務所・銀行・住宅・駐車場の用途をもつ高層建物を建設する一大事業である。施設建築物は高層の複合施設である B-1-1 部分と、低層 4 階建の事務所棟 B-1-2 部分に分かれ、B-1-1 部分は地上約 60m 13 階建の本体棟と地上約 40 m 9 階建の駐車場棟から成るランドマーク的な建物である。

2 埋蔵文化財保護協議

埋蔵文化財に関する保護協議は、平成 6 年 11 月 29 日から始まった。当時まだ準備組合の担当者から事業概要の説明を受け、開発事業による埋蔵文化財への影響と、旧建物による破壊範囲の確認が問題となった。まず平成 7 年 2 月 15 日に仁科工業の工場解体前に空き地にて 3 ヶ所の試掘を実施した [第 4 図]。その結果、開発予定区域内には良好な埋蔵文化財の包蔵があることが判明したが、遺物包含層が現地表から約 35~80cm と比較的浅いため、既存工場建物部分については基礎などによりすでに破壊を受けている可能性が高いことが予想された。また基本的に掘削を伴わず盛土造成となるロータリー等については、破壊の可能性がないため現状保存とした。その後平成 7 年 5 月 17 日の保護協議にて、計画建物の建築範囲の中で、旧工場建物範囲を除いた部分である約 800m²を埋蔵文化財保護対象とし、旧工場建物解体後に記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

平成 7 年 1 月 17 日付け北長 B 1 再開発第 13 号にて、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出を委託者となる北長野駅前 B 1 地区市街地再開発組合の理事長から受け、長野県教育委員会に進達し、同年 3 月 22 日付け 6 教文第 5-332 号にて県教委より発掘調査実施の指導を受けた。同年 9 月 18 日付けで委託者から発掘調査の依頼を受け、平成 7 年度に現場における発掘調査を実施・完了し、平成 8 年度にその整理調査を実施して本書を刊行する旨の埋蔵文化財協定書を、長野市教育委員会教育長との間で同年 9 月 22 日付けで締結した。

現場における発掘調査は、平成 7 年 10 月 2 日から同年 11 月 28 日までの 58 日間、実質調査日数は 36 日、作業員は 1 日約 23 人、延べ 625 人を数える。整理調査は平成 8 年度に実施し、検出遺構・出土物の整理・分析をすめ、本書を刊行した。



第1図 吉田古屋敷遺跡位置図 (Scale=1/30,000)

第2節 調査日誌抄

1995 (平成7) 年

- 10月2日(日) 雨後晴れ A区重機による表土剥ぎ作業開始
- 10月4日(月) 起因事業の起工式 (重機作業休止)
- 10月11日(月) 晴れ 器材搬入等、A区西側から壁面精査、遺構面検出作業、SD1掘下げ。
- 10月12日(月) 晴れ A区S J 1確認、掘下げ開始。
- 10月13日(火) 晴れ S J 1木棺の痕跡確認。SK1完掘。
- 10月16日(木) 晴れ 作業員増員。SA1掘下げ開始。
- 10月17日(金) 晴れ A区SA1床面確認。
- 10月18日(土) 晴れ A区SD1、SK2完掘。
- 10月19日(日) 晴れ A区一部に残る包含層を人力で除去。
- 10月20日(月) 晴れ A区S J 2、S C 1確認。
- 10月23日(木) 晴れ 現場事務所の移動。コーディック・システム (CS) 測量1回目。
- 10月24日(金) 曇時々雨 測量図結線。A区東端包含層除去。
- 10月25日～26日 公立埋文協全国研修会出席のため現場休業。
- 10月27日(金) 晴れ A区全体写真撮影。
- 10月30日(日) 晴れ A区包含層除去、B区遺構検出作業。
- 10月31日(月) 晴れ A区トレンチ設定、掘下げ。
B区SA2・3掘下げ開始。
- 11月1日(火) 曇り B区SA8・10掘下げ、8は完掘。
- 11月2日(水) 晴れ B区各住居跡掘下げ。
- 11月6日(日) 晴れ A区SD10トレンチ設定。
- 11月7日(月) 晴れ A区SD10、B区各住居跡掘下げ。
- 11月8日(火) 曇り後雨 A区SD10、B区各住居跡掘下げ。
- 11月9日(水) 雪 降雪のため現場作業中止。
- 11月10日(木) 晴れ A区SA13、B区各住居跡掘下げ。
- 11月13日(日) 晴れ A区SA13、B区各住居跡掘下げ。
- 11月14日(月) 晴れ A・B区CS測量2回目。
- 11月15日(火) 曇り B区CS測量図結線。
- 11月16日(水) 晴れ A区測量図結線。B区全体写真撮影。
- 11月17日(木) 晴れ B区2次面まで重機による掘削。
- 11月21日(日) 曇り B区2次面遺構検出作業。
- 11月22日(月) 晴れ B区2次面小穴群掘下げ開始。
- 11月27日(日) 晴れ B区2次面全体写真、測量3回目。
- 11月28日(月) 晴れ B区2次面測量4回目、結線。
器材撤収、現場作業完了。



写真1 A区重機による表土剥ぎ



写真2 A区調査風景



写真3 大型建設機械の迫る中...



写真4 B区1次面調査風景

第3節 調査体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の整備事業にかかわる調査を長野市教育委員会社会教育課が担当し、各種開発行為にともなう対応は埋蔵文化財センターが担当している。緊急発掘調査は長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施している。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	丸田修三
		所長補佐	小林重夫
		所長補佐	矢口忠良

庶務係	(係長 小林重夫)		
	事務員 青木厚子		
調査係	(係長 矢口忠良)	専門員	中殿章子
	主査 青木和明	専門員	山田美弥子
	主査 千野 浩 (H8～)	専門員	寺島孝典 (～H7)
	主事 千野 浩 (～H7)	専門員	西澤真弓
	主事 飯島哲也 (調査主任)	専門員	小野由美子 (調査員)
	主事 風間栄一	専門員	永井洋一 (～H7)
	主事 小林和子	専門員	堀内健次
	専門主事 清水 武	専門員	藤田隆之
		専門員	勝田智紀 (H8～)
		専門員	宮川明美 (H8～)
		専門員	小林まゆ佳 (H8～)

調査指導 長野県立歴史館 考古資料課専門主事 網田弘実

調査員 矢口栄子、青木善子、勝田智紀

発掘作業員 荒井久子、池田光子、岩崎寛治郎、岩崎利子、大井光子、金子ゆき、倉島邦子、小林紀代美、小林さと、佐藤君江、佐藤幸子、佐藤はま、佐藤ひで子、鈴木友江、谷内京子、戸谷弥生、中島芳江、中村忠彦、成田孜子、成田とよみ、新津三千子、原山薫三郎、丸山良子、宮沢けさよ、宮澤本矩、宮澤芳美、村橋寿美男、山田裕子、吉沢トシ子、勝田千亜紀、北村寛之、神頭幸雄、小林三郎、美谷島昇、横川基三

整理作業員 池田見紀、岡沢治子、勝田千亜紀、小泉ひろ美、清水竜太、多羅沢美恵子、塚田容子、徳成奈於子、鳥羽徳子、西尾千枝、向山純子、武藤信子

測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治

発掘調査の実施に際し、事業委託者である北長野駅前B-1地区市街地再開発組合におかれては埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。また現場調査時、さらに整理調査において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

北長野駅前B-1地区市街地再開発組合 理事長 渡辺久夫、事務局 楠原純照・高井亘・原秀晴

北野・清水・守谷 建設共同企業体 横山武男

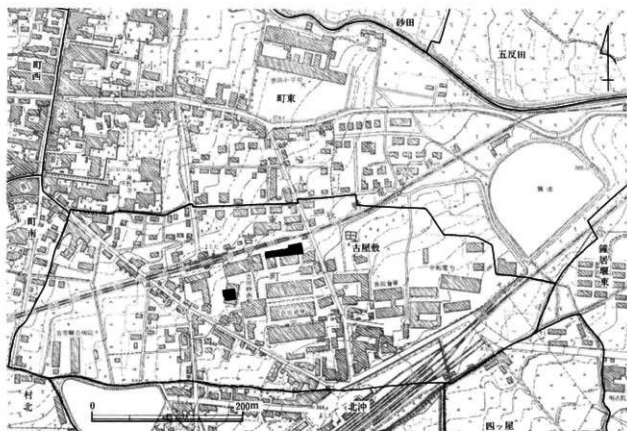
長野市役所都市開発部市街地整備局 再開発係長 南澤純一

第Ⅱ章 吉田古屋敷遺跡周辺の環境

第1節 調査地の位置と地形

長野市の最高地点標高1917.4mの飯綱山を水源とする浅川は、中曾根集落のある山間部を浸食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として盆地内に流れ込んだのち、流路を南東にとり、富竹地籍付近で方向を北東方向へ大きく変え千曲川と合流する。この浅川を中心とした一帯には、東南方向になだらかに傾斜する広大な扇状地形が展開する。

今回の発掘調査地点は長野市吉田地区に属し、JR北長野駅の北側、長野電鉄信濃吉田駅の南側にあたり、周辺は東南への緩やかな傾斜が認められる良好な扇状地形を示す扇端部に位置している。吉田地区と稲田地区をつなぐ他力橋通りから浅川は天井川となり、下流の通称「メガネ橋」ではJR信越線の上を長野電鉄線と平行に流れる。さらに工事中のJR北陸新幹線や都市計画道路「東豊線」もここを交差することからもさまざまな幹線が集中する要所といえよう。調査地はJR北長野駅と長野電鉄信濃吉田駅の間に位置し、長野市街中心地へも10分たらずでアクセスできる交通の要所であり、発掘調査着手前は仁科工業の工場と農協吉田支所があった場所である。近年の開発ラッシュは当地区にもおよび、開かずの踏み切りとの懸高き北長野駅北側にある踏切を地下立体交差でアンダーパスする市道吉田朝陽線道路改良（吉田東町踏切除去）事業や、通称SBC通りの東端にあたる北長野通りの拡幅事業もJR北長野駅前に接続する計画である。調査地南側にはすでにB-3地区市街地再開発事業として東急ライフが営業しており、起因事業が完了すれば長野市北部の核となる立地条件である。



第2図 調査地付近の字界図 (Scale=1/5,000)

(地形図は大正15年測量、昭和27年修正)

第2節 吉田地区の発掘調査歴

吉田古屋敷遺跡の属する長野市吉田地区は、広大な浅川扇状地遺跡群にあって比較的密度の高い状態で埋蔵文化財が包蔵されている地域でもある。市街地に近いこともあり早くから住宅地あるいは商業地として機能し、これら開発行為にともなってこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。第3図の吉田地区の発掘調査地点番号に合わせ概述する。

2 吉田古屋敷遺跡② —吉田踏切除去事業地点—

市道吉田朝陽線道路改良（吉田東町踏切除去）事業にともない、平成7年度より発掘調査を継続実施している。平成7年度調査区（A区）では、縄文時代後期土坑1基と、弥生時代後期の環濠と考えられる大溝跡1条、溝跡2条、土坑6基が確認された。大溝跡は調査区を縦断するように検出され、最大幅約1.2m、最深部約1mを測り、埋土の堆積状況は3層に大別され、北陸系統の土器を多く含む多量の土器が出土している。平成8年度調査区（B区）では、縄文時代後期の土坑1基、性格不明遺構1基、弥生時代後期の木棺墓1基、土坑1基、平安時代前半の性格不明遺構1基、他に小穴が多数検出されている。木棺墓からは棺材の小口痕が明瞭に残存し、ガラス製丸玉12点、小玉5点が出土し、その出土状況から東頭位の埋葬状態が想定できる。

参考文献 長野市教育委員会 1996『長野市埋蔵文化財センター所報』No.7

3 浅川扇状地遺跡群 —新幹線調査地点—

平成5年度から長野市北部においても本格的に着手された北陸新幹線の建設工事は、浅川扇状地遺跡群の扇端部を横断する形で貫き、これにともない発掘調査は姉長野県埋蔵文化財センターが実施し、その調査概要が同センター発行の年報に報告されている。これによれば、ほぼ全域にわたって埋蔵文化財の包蔵を確認することで、W7B区（三輪・古野）の調査区からは小規模な古墳時代前期の水田跡、W10A区（中越）では古墳時代前期の周溝墓を検出し、周溝内からは布留系の二重口縁釜などが出土している。またW11・12区（北長野駅）からは縄文時代中期後半の加曾利E系などの埋壘が複数検出され、調査担当者は屋外埋壘である可能性を示唆している。なお同調査地点からは壘2個体の組み合わせによる弥生時代後期の土器棺墓も確認されている。このほかにも早苗町・東鶴賀・吉田・稲田など各地区の一連の発掘調査でも同様に多くの遺構が検出されている。

参考文献 姉長野県埋蔵文化財センター 1993『長野県埋蔵文化財センター年報』10

姉長野県埋蔵文化財センター 1994『長野県埋蔵文化財センター年報』11

4 吉田四ツ屋遺跡

平成7年度に民間マンション建設工事にともない、JR北長野駅南側で発掘調査を実施した。縄文時代後期住居跡2軒、弥生時代中期住居跡4軒、同後期住居跡2軒、土器棺墓1基、古墳時代前期住居跡2軒、墳丘墓2基、奈良～平安時代住居跡6軒、溝跡5条のほか、土坑・小穴が確認されている。縄文時代住居跡のS B15は配石をともっており、敷石住居と考えられる。土器棺墓内からはガラス玉や管玉が出土している。墳丘墓S Z 1は前方後方形の周溝をもつものと考えられるが、大半が調査区外となり埋葬主体部は確認されていない。S Z 2からは壘形輪軸が出土している。

参考文献 長野市教育委員会 1996『浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)、栗河原遺跡』

5 吉田町東遺跡(1) —住宅分譲地地点—

平成6年度に民間宅地造成工事にともない実施した発掘調査で、弥生時代後期の住居跡2軒、同後期末から古墳時代初頭の大溝跡2条、平安時代の住居跡1軒が確認された。このうち大溝跡は同一の遺構と考えられ、一辺14mの方形区画となる可能性がある。また遺構は確認できなかったが、検出面や後世の攪乱から縄文時代中期の土器片が多数出土し、近隣に遺構の存在が予想される。

参考文献 長野市教育委員会 1995『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡②・吉田町東遺跡』

6 吉田町東遺跡② -北長野通り地点-

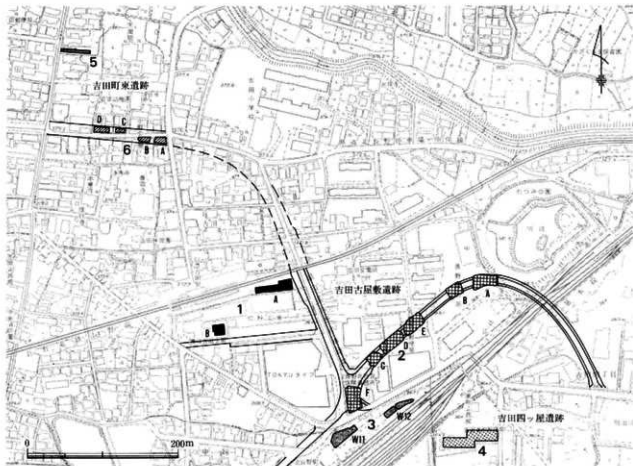
平成6年度に緊急地方道路整備事業（北長野通り）の道路改良にともない、通称SBC通りの東端を発掘調査した。先線は吉田小学校の前を通過してJ R北長野駅前接続する計画であり、発掘調査も以後継続実施の予定である。検出した遺構は弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期～奈良時代の住居跡3軒のほか河川跡、溝跡、土坑などである。SA1住居跡は破壊されたカマドが検出され、構築石材が散乱していたが、土師器長胴甕が伏せられた状態で出土している。

参考文献 長野市教育委員会 1995『長野市埋蔵文化財センター所報』No.6

このほか、弥生時代後期前半の単層集落遺跡である長野吉田高校グランド遺跡がある。昭和45年度にはプール改築事業に、昭和50・51年度には北部都市下水道事業に、そして昭和60年度には体育館および格技室新築事業にともないそれぞれ発掘調査されている。なおこの遺跡は1970年に笹沢浩によって「吉田式土器」が型式設定された標識遺跡である。また吉田地区に隣接する稲田地区、三輪地区の発掘調査は枚挙に暇がない。

吉田地区在住の郷土史家長田長治氏は地区内を丹念に踏査され、遺物を表面採集されている。これにより地区内でも遺物の所属時期ごとに表採ポイントは異なるらしく、より詳細な資料の蓄積が求められている。

このように今回の調査地点は、これら周辺の発掘調査と合せて浅川扇状地遺跡群の中でも近年集中して発掘調査された地域であり、今後個々の遺跡を検討することによって各時代の様相が明らかになろう。



第3図 吉田地区の発掘調査地点 (Scale=1/5,000)

1. 吉田古屋敷遺跡 (B-1地点)
2. 吉田古屋敷遺跡 (踏切地点)
3. 浅川扇状地遺跡群 (新幹線地点)
4. 吉田四ツ屋遺跡
5. 吉田町東遺跡 (宅地分譲地点)
6. 吉田町東遺跡 (北長野通り地点)

第三章 調査成果

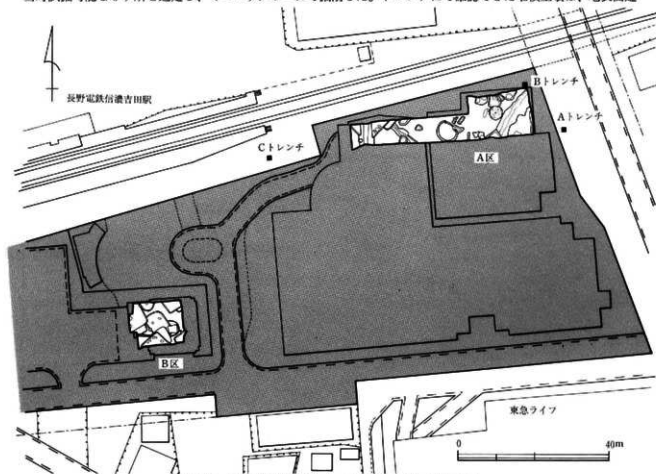
第1節 調査の方法と概要

1 調査区の設定

調査地となる「都市計画事業北長野駅前B1地区第一種市街地再開発事業」予定地約1haのうち、主体となる建物の建築敷地面積7,530㎡、建築面積4,640㎡について埋蔵文化財包蔵状況との調整の結果、埋蔵文化財保護対象面積を既存建物による破壊を免れた約800㎡とし、実質750㎡を発掘調査した。便宜的に高層建物であるB-1-1部分（主に駐車場棟）をA区とし、低層4階建の事務所棟B-1-2部分をB区として区分し、特にB区は2面を調査している。起因工事工程との調整からA区から調査をはじめ、一部に併行しながらB区1次面へ、そしてB区2次面へと移行した。地表面から遺構検出面までは、法面バケットを装着した大型重機により徐々に掘削し、以後は作業員により遺構の検出・掘下げを行い、調査員が記録作業に従事した。なお調査中に起因工事が本格着工されたことにより、クレーンなど大型建設機械が往き交う中での発掘作業となったため、安全対策には細心の注意を払った。

2 試掘調査時の基本土層

平成7年2月15日(木)に実施した埋蔵文化財の包蔵状況の把握を目的とした試掘調査は、事業予定地内において当時試掘可能な3ヶ所を選定し、ミニバックホーにて掘削した。トレンチにて確認できた堆積土層は、地表面近



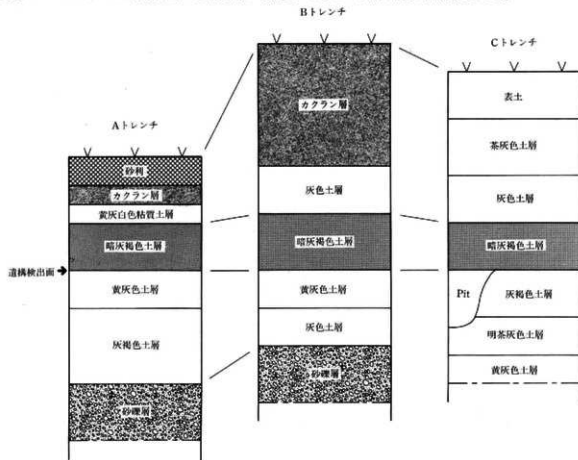
第4図 調査区位置図 (Scale=1/1,000、■…試掘箇所)

くのカクラン、礫石を含まない上層、下層となる浅川特有の礫層の3種に大別される。遺物や炭化物を含んだ遺物包含層は暗灰褐色土層であり、A～Cいずれのトレンチにも存在することから、事業予定地内には全般的に展開していることが容易に予想された。遺構検出面は黄褐色土層ないしは灰褐色土層の上面に設定した。

3 各調査区の概要

A区では中世から縄文時代後期までの遺構が同一検出面にて確認されている。検出した遺構は、古墳時代後期前半の竪穴住居跡2軒(SA1・12)、縄文時代後期前葉の敷石住居跡1軒(SA13)、平地住居と考えられる弥生時代中期の環状溝跡1基(SC1)、弥生時代後期の木棺墓1基(SJ1)、縄文時代後期中葉の集石土坑1基(SJ2)、中世の溝跡2条(SD1・12)、縄文時代の溝跡2条(SD2・10)のほか、土坑・小穴など106基、溝跡などである。土坑・小穴は出土する遺物も少なく、時期の特定ができないものが多い。SA13の敷石(敷板)住居跡は長野市域では初見であり、4枚の敷板が想定できるなど敷石プランに特徴がある。

B区は弥生時代中期以降の第1次遺構検出面と、縄文時代以前の可能性がある第2次遺構検出面の2面を調査した。第1次遺構検出面にて検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居跡1軒(SA3)、古墳時代後期後半の竪穴住居跡2軒(SA5・6)、古墳時代後期前半の竪穴住居跡3軒(SA2・4・7)、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒(SA10)、弥生時代中期の竪穴住居跡2軒(SA8・9)、時期不明の竪穴住居跡?1軒(SA11)のほか、溝跡、土坑、小穴等である。SA3の覆土上層からは帯金具の銅製丸軋が出土している。第2次遺構検出面では、建物遺構の可能性がある縄文時代の環列土坑群1基のほか、土坑・小穴など119基である。2次面の遺構は出土遺物がほとんどないため、層位的に縄文時代の可能性があるという消極的な時期比定である。



第5図 試掘調査時の基本土層柱状図 (Scale=1/20)



写真5 A区西側 (西から)



写真6 A区西側 (東から)



写真7 A区東側 (南西から)



写真8 A区東側 (東から)



写真9 B区1次面 (東から)



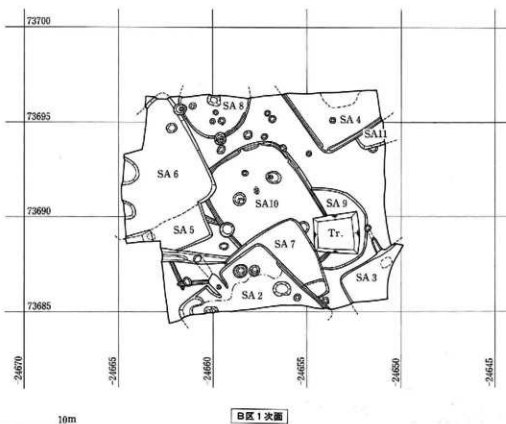
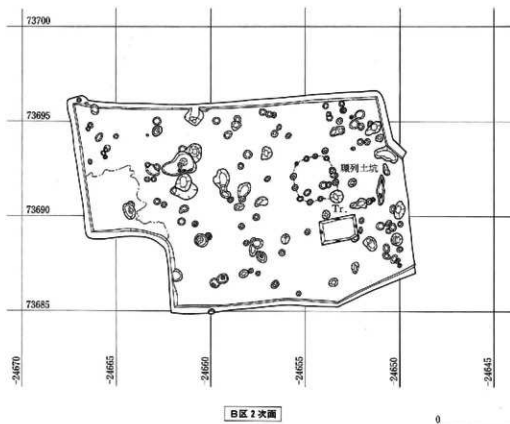
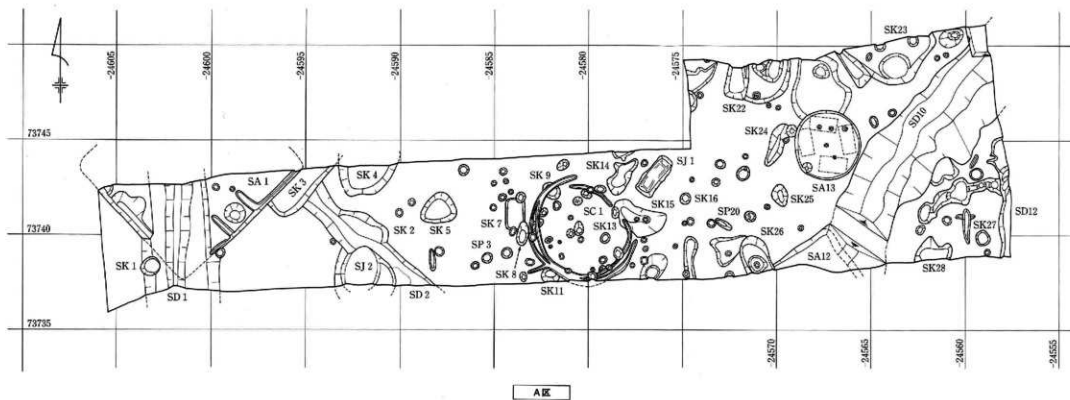
写真10 B区1次面 (西から)



写真11 B区2次面 (東から)



写真12 B区2次面 (西から)



第6図 吉田古風敷遺跡 遺構分布図 (Scale=1/200)

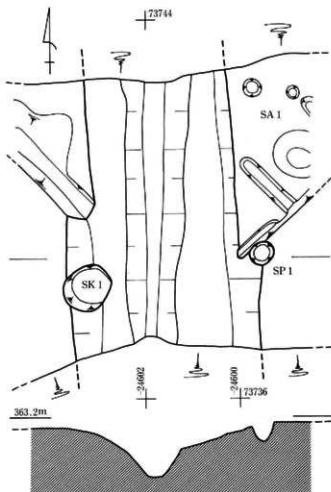
第2節 中世の遺構と遺物

1 溝跡

A区SD1

A区西側にて検出された大溝跡で、古墳時代後期前半の住居跡SA1を切っている。幅約4m、検出面からの深さ約1.1mを測り、ほぼ北から南に向けて流れているものと考えられる。出土遺物〔第8図〕は比較的多く、カワラケに近い土師器の杯(1・2)、内面を黒色処理された杯(3・4)、鉢(5)、甕(6)、甕(7)、須恵器甕(8)、内耳土器(9~13)、青磁の杯(14)、黄瀬戸の菊皿(15)、志野の型打ち皿(16)、円板状土製品(17・18)のほか、打製石斧・磨製石斧・凹石〔第58図〕がある。遺物の多くは埋土中層より出土しており、底部近くにはなかった。出土した土器のうち3~8と円板状土製品(17・18)は、SA1等からの混入品と考えられ、石器も縄文時代の所産である。内耳土器や焼き物の出土から、遺構の所属時期を中世後半とした。

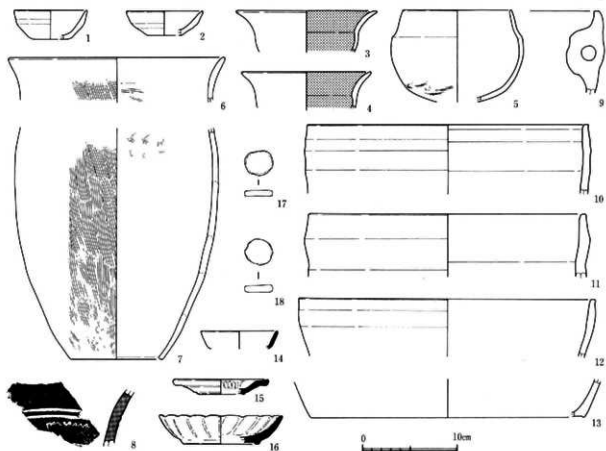
またA区の東端にて検出したSD12からも、混入した縄文土器片や須恵器の壺体部破片のほかに内耳土器が出土しており、該期の遺構と考えられる。



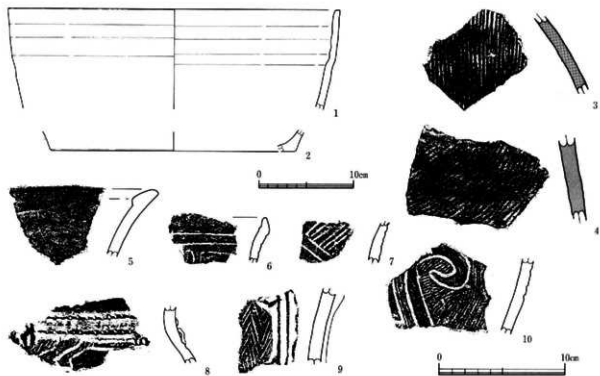
第7図 SD1実測図 (Scale=1/80)



写真13 SD1 (北から)



第8图 SD1出土遺物実測図 (Scale=1/4)



第9图 SD12出土遺物実測図 (Scale=1/4, 3~10は1/3)

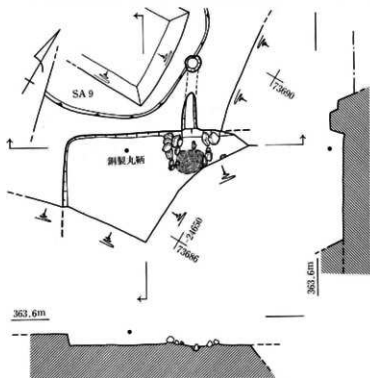
第3節 奈良時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

B区SA3

該期の遺構はA区では検出されておらず、B区の南東隅にて検出したカマドをもつ竪穴住居跡のみである。全体の1/4ほどを確認したにすぎず、ほとんどは調査区外となる。おそらく一辺約5.4mほどの方形を呈する平面形態と思われる。検出面からの床面の深さは25cmを測り、堅緻ではない。カマドは、約N-30°-Wに主軸を採り、比較的残存状態が良好であった〔第11図〕。袖部の芯材として幼児頭大の石材が配列されており、おそらくその周りに粘土を貼り付けたものと考えられるが、燃焼部側壁の焼土を含め袖部の粘土は残存していなかった。燃焼部床面は支脚石南側にて被熱硬化していたが、その上層に焼土塊があった〔写真15〕。この焼土塊と硬化床面とは連続せず、住居覆土が堆積している。おそらく住居廃絶時のカマド破壊行為の痕跡であろうが、あるいは住居跡埋没過程での別遺構の可能性も捨てきれない。支脚石は高さ16cmの台形状で、床面に埋め込んであり、床面からは6cmほど突起する。煙道は水平面から約10°の登り傾斜をもち、灰溜まり土坑も残存していた。

遺物は覆土中かあるいはカマド付近から出土したものであり、床面に接した遺物はなかった。土器以外では覆土上層からは銅製の帯金具（丸軋）と陶製紡錘車が出土している〔第12図〕。土器では須恵器の杯蓋（3～6）、無台の杯身（7～8）、高台付の杯身（9～10）、土師器の内黒処理された鉢（11）、長胴甕（12～17）、小型甕（18～20）、須恵器である可能性が高いと思われる甕（21～23）、櫃？（24）がある〔第13図〕。3は古墳時代の須恵器であり、混入品と考えられる。8・10・24は軟質のいわゆる赤焼け須恵器であり、また21～24は土師器にしては明燈褐色を呈するなど焼成状態がきわめて良好で、同じく赤焼け須恵器になる可能性が高いと思われる。11の鉢には把手が付いていた痕跡がある。13の長胴甕の内面には炭化物が付着している。



第10図 SA3実測図 (Scale=1/80)

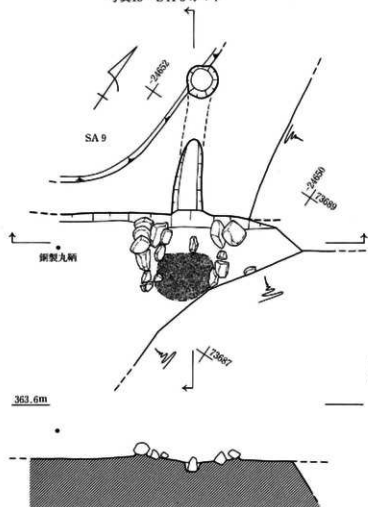


写真14 SA3 (南東から)

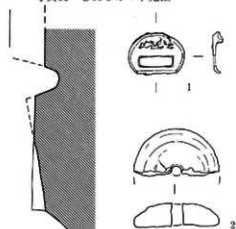


写真15 SA3カマド

写真16 SA3カマド完掘



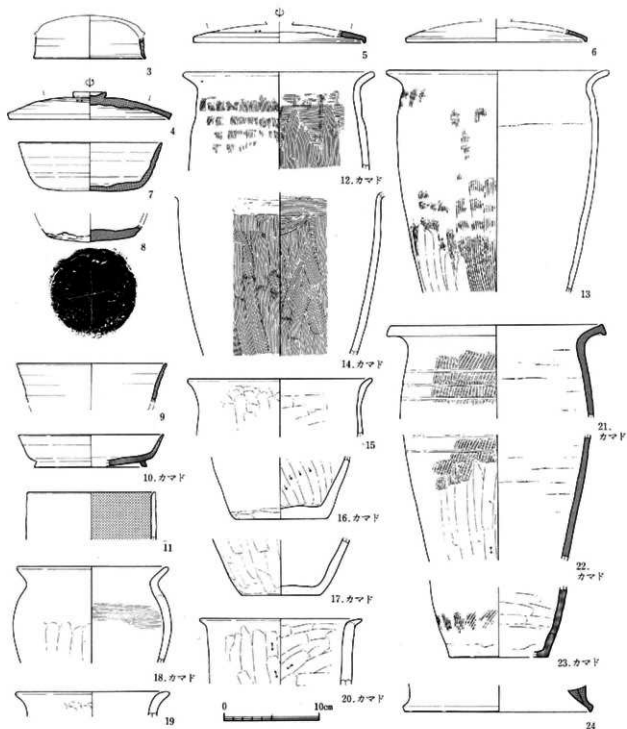
第11図 SA3カマド実測図 (Scale=1/40)



第12図 SA3出土
遺物実測図
(Scale=1/2)



写真17 銅製丸煎



第13図 SA 3出土土器実測図 (Scale=1/4)



写真18 SA 3出土土器

第4節 古墳時代後期後半の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

B区SA5・6

該期の遺構もA区では検出されておらず、B区の西側にて検出した切合い関係にある竪穴住居跡2軒のみである。当初検出作業時にSA6がSA5を切っている、すなわちSA5よりSA6が時期的に新しいと判断して掘り進めたが、覆土による分別が困難で、床面もほぼ同一レベルであったことから新旧関係は疑わしい。SA6は一辺約6mの正方形を呈し、北西半分は調査区外となる。検出面からの床面の深さは約30cmで、堅緻な床をもたず平坦ではない。調査区内ではカマドの痕跡は確認できず、おそらく北西に設置されているものと考えられる。住居の同時性は不明ながら土坑3基を確認した。西側の調査区壁ぎわの2基は直径140cmと90cmで、床面からの深さはそれぞれ、50cmと40cmである。住居北東壁近くの直径60cmの土坑は床面からの深さ40cmをはかる。いずれも柱穴とは考えにくい。SA5は一辺約3.5mの正方形を呈すると考えられるが、SA6との切り合い部分は不明瞭である。検出面からの床面の深さは約26cmで、同じく堅緻な床をもたない。ほんの一部を検出したにすぎないが、北西壁に焼土化した部分があり、カマドに隣接する場所の可能性もある。



写真19 SA5・6 (北東から)



写真20 SA5・6 (北西から)



写真21 平瓶出土状況

出土した土器は切り合い関係の不明瞭さから、相互に混入している可能性は否定できない。特にSA 6出土として取り上げた土器の中にSA 5のものが混入している可能性は高いといえる。SA 5出土土器として図示した土器は〔第15図〕、須恵器の杯蓋（1～3）、杯身（4～6）、椀かあるいは高杯の杯部（7）、土師器では内黒処理された杯（8）、高杯（9・10）、壺かあるいは甕の口縁部（11）と底部（12）である。須恵器の杯蓋はツマミとカエリが付き、和泉陶邑窯編年でいうⅢ期（Ⅲ型式）の特徴を示す。杯身の底部切り離し技法はへら切り後の回転ケズリ調整で、ロクロの回転方向は双方向看取できる。

SA 6出土として図示した土器は〔第16図〕、須恵器の杯蓋（1・2）と杯身（3）、土師器の杯（4～7）、おそらく高杯の杯部（8～10）、高杯（11・12）、須恵器の平瓶（13）、土師器の壺（14・15）、甕（16～18）、壺や甕あるいは甗などの口縁部（19～20）、同底部（21・22）、須恵器の大甕（23）などがある。このうち土師器の高杯（12）と須恵器の平瓶（13）はほぼ完形品で床面直上から出土した。須恵器杯蓋の2はSA 5出土の2・3とは同一個体ではないものの、胎土・焼成状態などから同一窯同時焼成の可能性が考えられる。

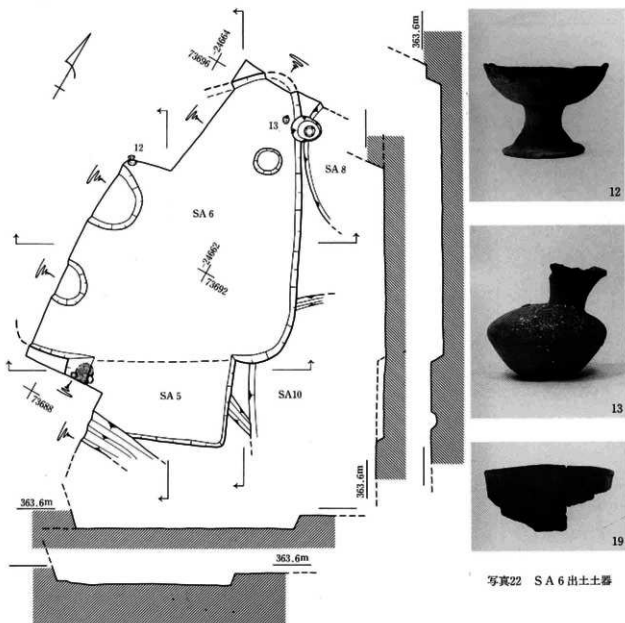
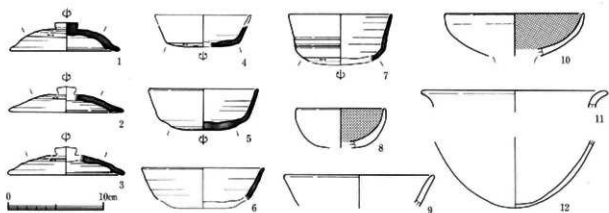
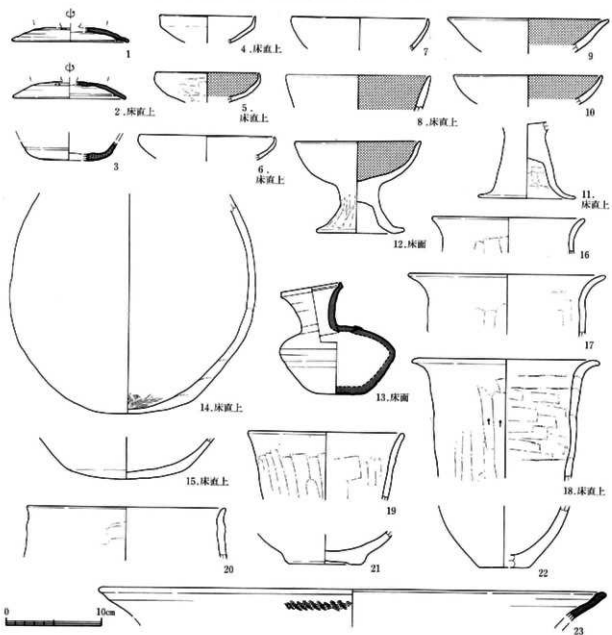


写真22 SA 6出土土器

第14図 SA 5・6実測図 (Scale=1/80)



第15图 SA 5 出土土器实测图 (Scale=1/4)



第16图 SA 6 出土土器实测图 (Scale=1/4)

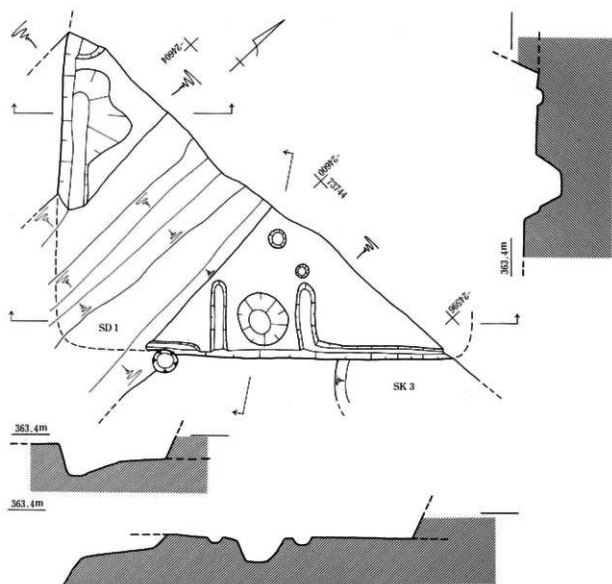
第5節 古墳時代後期前半の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

該期の竪穴住居跡は、A区で2軒（SA1・12）、B区で3軒（SA2・4・7）が確認されている。特にSA12は古墳時代中期末にさかのぼる可能性も考えられる。またSA4に切られるSA11は、確認した範囲も微少で出土物もごく少量であり、時期決定の根拠はきわめて乏しいが、仮に該期として報告する。

A区SA1

A区西側、中世のSD1に切れ、中心から東西に分断されている竪穴住居跡で、北側約1/2は調査区外となる。南辺と西辺のみが残存し、そこから一辺約8.8mの大型正方形プランを推定する。検出面からの床面の深さは26cmで、床面は明瞭であったが、土間状に叩き締められた堅緻な床はもたない。壁際には壁溝がめぐり、おそらく住居内を全周するものと考えられる。南辺には出入口と考えられる施設がある。直径110cm、深さ50cmの

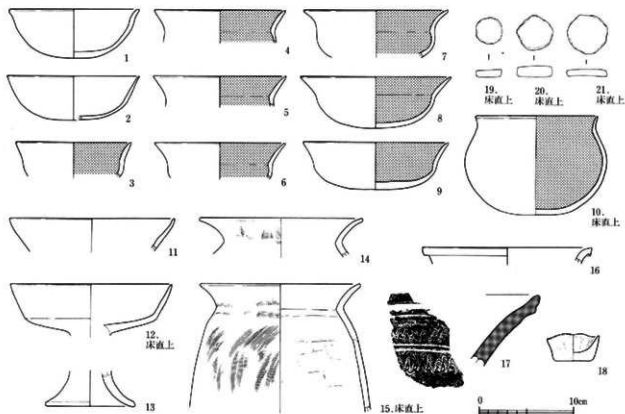


第17図 SA1実測図 (Scale=1/80)

土坑と、それを挟むように2本の間仕切り溝が壁から直角に延びている。調査区内ではカマドは確認できず、北西壁に設置されているものと考えられる。出土した遺物は、SD 1に切られていることもありあまり多くはない。図示した遺物〔第18図〕は、土師器の杯（1～9）、内黒処理された椀（10）、高杯（11～13）、甕（14・15）、甬の口縁部（16）、須恵器の甕口縁部（17）、ミニチュア土器（18）、土器片転用の円板状土製品（19～21）である。土師器の杯には口縁部が小さく外反するもの（1・2）と、大きく外反するもの（3～9）があり、後者はすべて内面が黒色処理されている。16の口縁部は古墳時代前期の外來系（北陸?）の影響を示唆する土器であり、混入の可能性が高い。また、第8図に示した中世溝跡のSD 1出土遺物の中にある3～8の土器と17・18の円板状土製品は、本来SA 1に帰属する可能性が高い。



写真23 SA 1（南東から）



第18図 SA 1出土遺物実測図 (Scale=1/4)

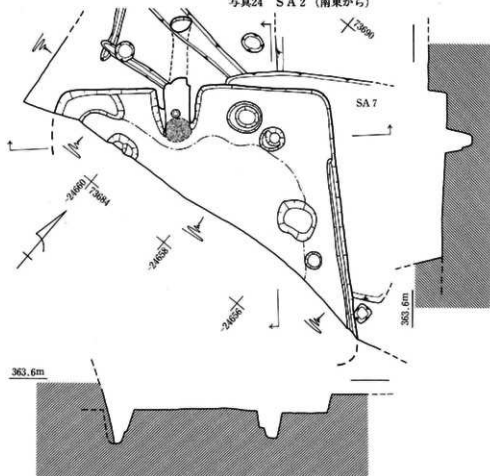
B区SA2

B区南側で検出し、約1/2が調査区外となる。一辺約5.9mを推定する正方形プランをもつ。北東壁際には壁溝が掘られ、西隅壁際では土坑状となる。柱穴は調査区内では北と西で2基確認し、おそらく4本柱の建物となろう。検出面からの床面の深さは40cmを測り、柱穴列の内側、住居内中央部分には堅緻な床面が広がっている。カマドは北西壁に設置され、残存状態は比較的良好である〔第20回〕。天井部は残っていないが袖部は残存し、燃烧室側の壁は焼土化している。袖部には芯材としての石や土器片は使用されず粘土のみであるが、南西側袖の南東端には石材が1個あり、焚き口を保護する機能が考えられる。燃烧室中央に壺の口縁部〔第21回、17〕が配置されており、支脚として転用された可能性が高い。支脚土器の南東側は直径約50cmの円形状に堅く焼土化しており、焚き口と判断される。煙道はほぼ水平に北西に延び、灰溜まり土坑へ接続する。灰溜まり土坑はSD6によって一部破壊されていた。北柱穴の西側に深い土坑が穿たれており、カマドに代表される厨房施設に関連する土坑と考えられる。図示した土器は、土師器

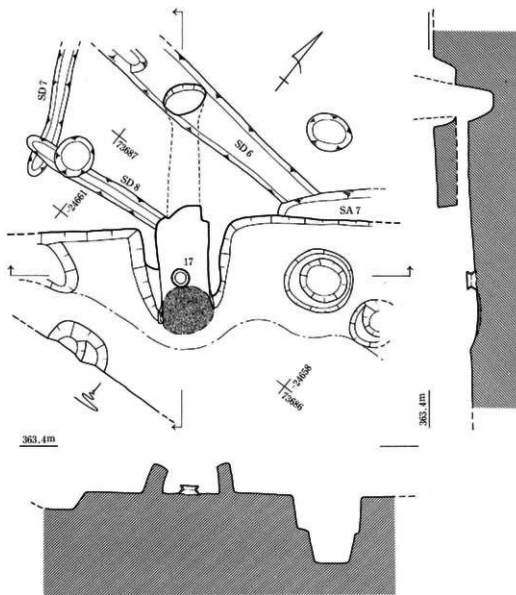


写真24 SA2 (南東から)

の杯(1~6)、高杯(7~10)、内黒処理された鉢(11)、小型鉢(12)、各種底部(13~16)、支脚に転用された壺の口縁部(17)、小型甕(18)、甕(19)がある。このうち杯とした4・5と高杯とした7・8は相互の器種となる可能性がある。当該器種の口縁部のみでは判断できない。



第19回 SA2実測図 (Scale=1/80)



第20図 SA 2 カマド実測図 (Scale=1/40)



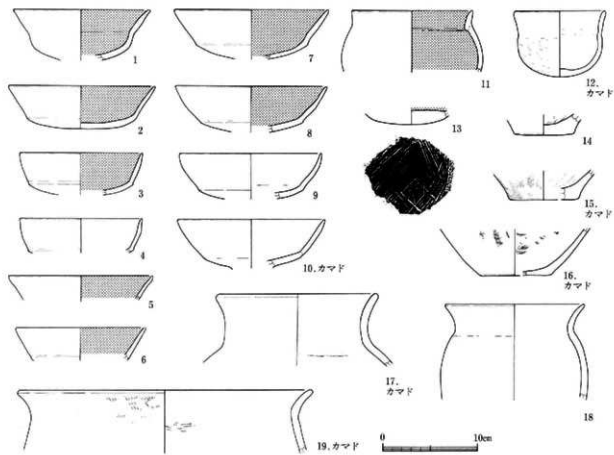
写真25 SA 2 カマド



写真27 支脚に転用された土器



写真26 SA 2 カマド内部

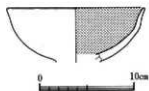


第21図 SA 2 出土土器実測図 (Scale=1/4)

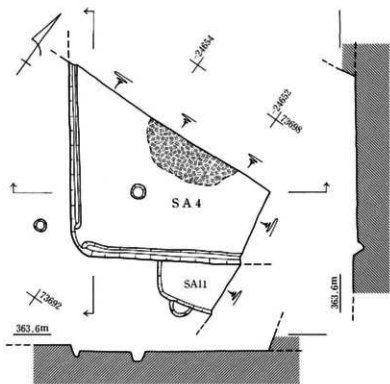
B区 SA 4・11

B区北東隅で検出し、約1/3が調査区外となる。正方形を呈すると思われるが規模は不明である。床面は堅緻ではなかったが、住居中心部には炭化物が広がっていた。壁際溝をもつことや、出土した高杯【第23図】から該期の遺構とした。

SA11はさらに不明瞭で、住居であるかさえ疑わしい。出土遺物はなかった。



第23図 SA 4 出土土器実測図



第22図 SA 4・11実測図 (Scale=1/80)

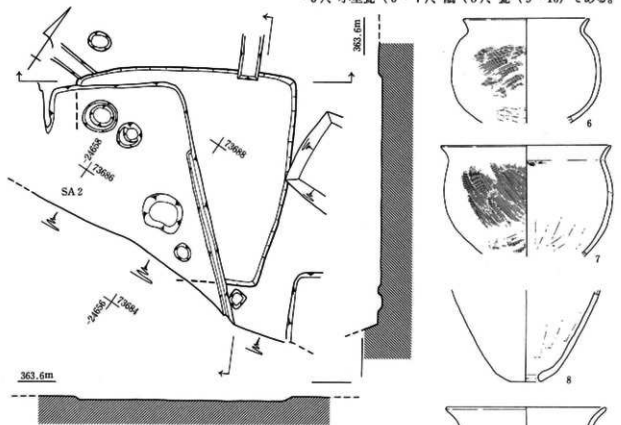


写真28 SA 4 (北西から)

B区SA7

SA 2に切られており、弥生時代後期のSA 8を掘り下げている際に確認した遺構である。したがって明確な状態での検出ではなく、実測図も図上復元したものであり、遺構写真も撮影できなかった。一辺約4.6mの正方形を呈すると思われるが、床面も堅緻な部分はなく不明瞭である。柱穴や壁際溝も確認できなかった。

出土遺物は少なかつたがSA 8との混入が著しい。図示した土器〔第25図〕は土師器の杯(1)、鉢(2)、高杯(3~5)、小型甕(6・7)、甕(8)、甕(9・10)である。



第24図 SA 7実測図 (Scale=1/80)

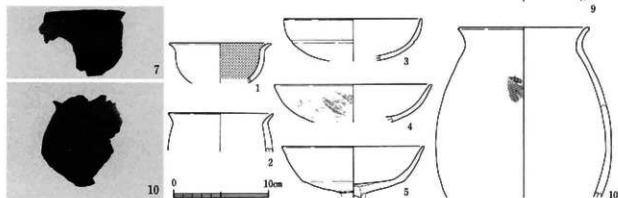


写真29 SA 7出土土器

第25図 SA 7出土土器実測図 (Scale=1/4)

A区SA12

A区東南側で検出し、約1/3が調査区外となる。正方形プランをもつものと推測されるが、SD10との境界となる北東壁の掘下げに失敗したこともあり、規模は不明である。検出面からの床面の深さは約46cmで、調査区内では柱穴、壁際溝、堅緻な床は確認できなかった。

第27・28図に図示した出土遺物は、すべて覆土中からの出土で、須恵器の杯蓋(1)以外はすべて土師器である。器種は高杯(2・3)、鉢(4~5)、甕(7~18)、壺(19)、甕(20)である。6~14の甕はハケ調整ののちミガキが施され、15~18の甕はハケ調整のみである。須恵器の杯蓋は、型的には若干古相の要素は残るもの、和泉陶器窯編年1期TK23型式併行とみられる。また土師器も、甕の長胴化傾向が著しくないなど、SA1・2・4・7に比して古相を呈し、古墳時代後期初頭あるいは中期末の時期比定が考えられる。

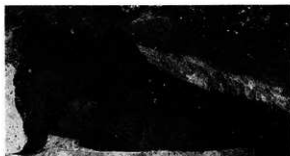
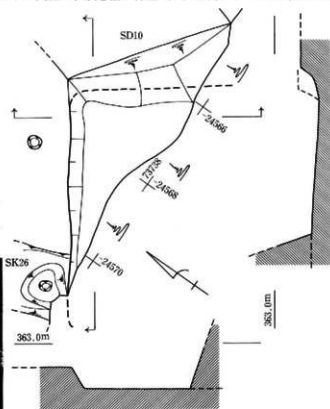
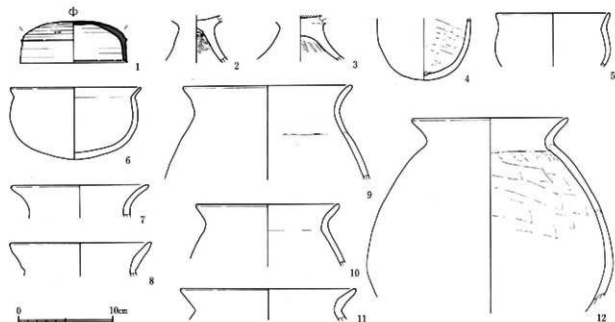


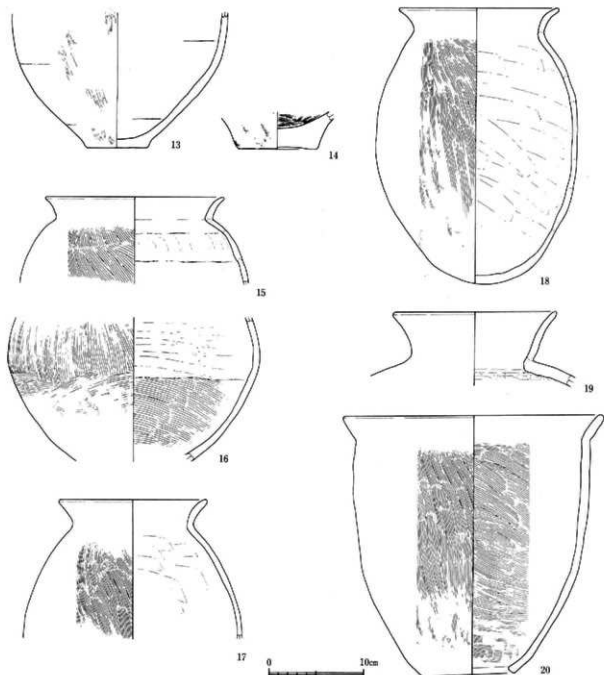
写真30 SA12(北西から)



第26図 SA12実測図 (Scale=1/80)



第27図 SA12出土土器実測図① (Scale=1/4)



第28图 SA12出土土器实测图② (Scale=1/4)

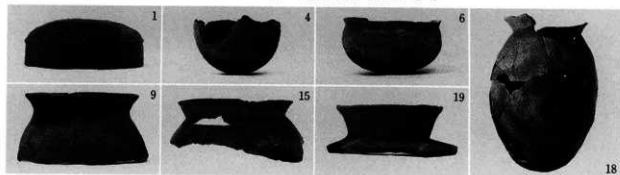


写真31 SA12出土土器

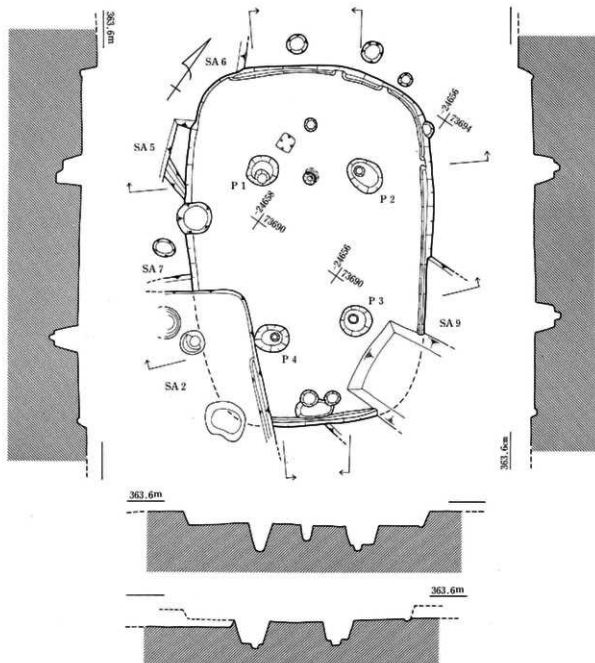
第6節 弥生時代後期の遺構と遺物

該期の遺構は、A区にて木棺墓1基（S J 1）、B区にて竪穴住居跡1軒（SA10）のみである。

I 竪穴住居跡

B区 SA10

B区のほぼ中央にて検出した隅丸方形を呈する竪穴住居跡で、長軸7.6m、短軸約5.2m、主軸方位N-37°-Wを測る。弥生時代中期のSA9を切り、SA6・7・2に切られているが、SA2のみが本住居跡の床面を破壊している。検出面からの床面の深さは28cmで、堅緻な床面は確認できなかった。南西壁を除いて壁際溝が巡っている。南東壁には壁際溝に接して土坑が3基穿たれており、階段状施設の痕跡と考えられる出入口遺構である。住居内の柱穴は4基長方形に配列され、それぞれに柱材を埋め込んだ痕跡が残っている。北西側の2基の柱穴の

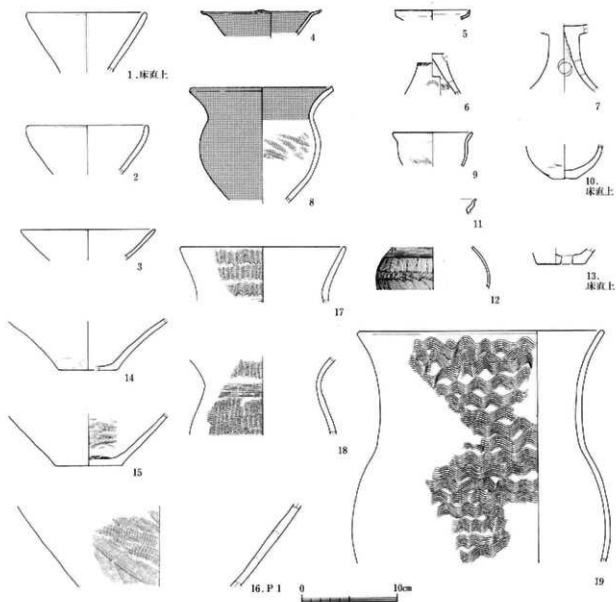


第29図 SA10実測図 (Scale=1/80)

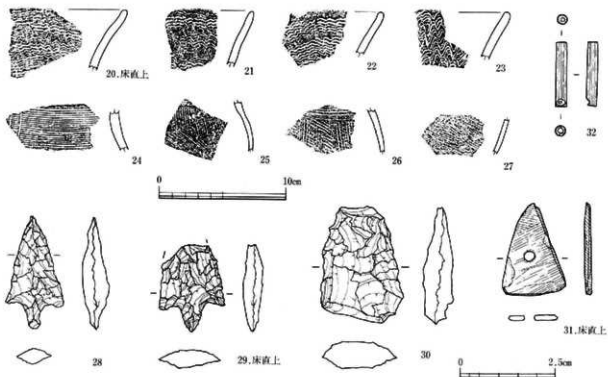


写真32 SA10 (北東から)

写真33 SA10 (南東から)



第30図 SA10出土土器実測図 (Scale=1/4)



第31図 SA10出土遺物実測図 (拓影S=1/3、石器S=1/1)

間には、一部に被熱焼土化した小穴がある。約33cmの深さで、深い掘込みを持つ炉に関係した施設となる可能性と、炉とは関係ない小穴の可能性も捨てきれない。後者の場合、炉は地床炉となる。

出土遺物は他住居の混入も著しかったが、図示した土器は高杯(1~7)、小型甕(8)、鉢(9・10)、S字状口縁台付甕(11・12)、甕(13)、壺(14~16)、甕(18・19)と、土器拓影(20~27)である。石器・石製品は打製凹基有茎石鏃(28・29)とその未製品(30)、磨製有孔石鏃(31)と管玉(32)である。

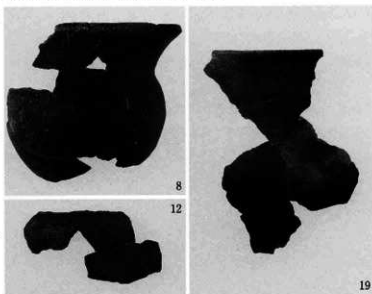


写真34 SA10出土土器

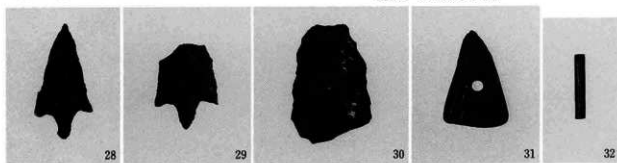


写真35 SA10出土石器

2 木棺墓跡

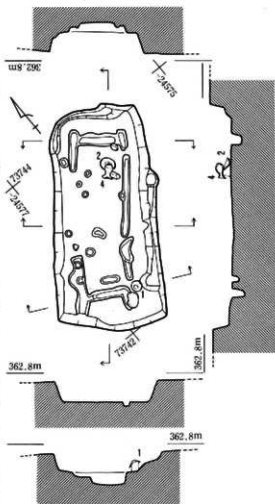
A区S J 1

A区中央やや東寄り、S C 1の北東にて検出した。円形周溝墓となる可能性を確認するため、墓墳を圍繞する円形溝等の検出にも努めたが、区画溝は確認できなかった。

墓墳は長軸2.4m、短軸1.04~1.14m、主軸方向N-35°-Eを測る若干台形ぎみの長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは23cmを測る。棺材の痕跡が明瞭に残っており、小口側の側板を地中深く埋め込むタイプ（福永分類I型木棺）の可能性が考えられる。長側板の痕跡も残っていたが、底板の存在はそれを判断する痕跡を確認できなかった。

長側板の痕跡は北東半と南西半で主軸に若干のずれが生じている。墓墳の主軸に対し、北東半の棺材痕はほぼ同じ角度であるが、南西半の棺材痕は約3°北側に振れている。このことから長側板が一枚板ではなく、2枚あるいはそれ以上の板材を組合せて木棺としていた可能性が考えられる。また供献土器とともに3個の転石が出土しているが、土器の供献行為にともなう何らかの機能の他に、棺材の仮押さえの機能を持っていた可能性も否定できない。

供献土器を出土した床想定面の下層には小穴や落ち込みなどの凸凹が看取され、掘り方とも考えられる。また墓墳内でも棺外は凹凸があり整然と掘られてはいない。



第32図 S J 1 実測図 (Scale=1/40)



写真36 S J 1 (北西から)

覆土中からの遺物の出土は少なかったが、供献行為が想定できる土器4点と、転石3点、鉄製品1点、石器1点が出土した。このうち鉄製品（5）と石器（6）は遺構にともなわない混入品の可能性が考えられる。鉄製品は片刃づくりの刀子と考えられ、石器は打製石斧である。

供献土器と考えられる出土土器はすべて赤色塗彩されたいわゆる箱清水式土器で、完形の鉢（1）、口縁部が若干欠けた小型壺（3）と、小型壺の口縁部破片（4）、高杯の杯部（2）の4点であった。出土位置は鉢以外は棺内北東側である。出土層位もほぼ床面直上であり、棺内あるいは棺上に置かれた可能性が考えられる。鉢のみ両側の棺材痕の外側で、覆土中からの出土である。完形品の土器内部の土は水洗浄したが何も検出できなかった。



写真37 S J 1周辺の状況（北西から）



写真39 S J 1棺材痕（北東から）



写真38 S J 1床面（南東から）



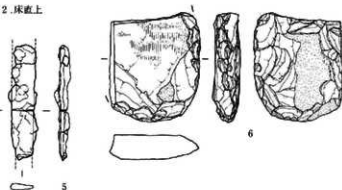
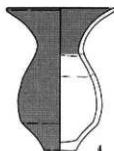
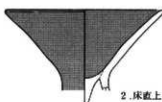
写真40 S J 1棺材痕（南西から）



写真41 S J 1完掘（南東から）



写真42 S J 1 遺物出土状況



第33図 S J 1 出土遺物実測図 (Scale=1/4, 5・6はScale=1/3)

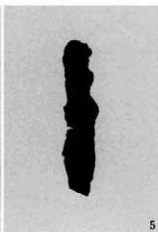


写真43 S J 1 出土遺物

第7節 弥生時代中期の遺構と遺物

該期の遺構は、A区にて平地住居と考えられる環状溝跡1基（SC1）と土坑（SK6）、小穴（SP14）の各1基、B区にて竪穴住居跡2軒（SA8・9）のみである。特にA区SC1周辺には多数の土坑・小穴があり、その多くは縄文時代の遺物を包含するものであるが、遺物を包含しないものの中には該期の遺構も存在する可能性は否定できない。

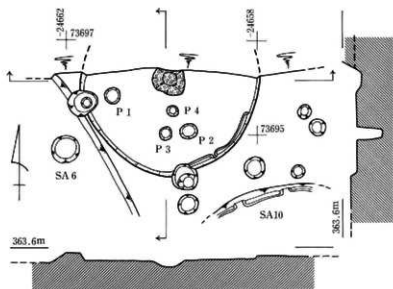
1 竪穴住居跡

B区SA8

B区の北側調査区壁にて検出し、約1/2が調査区外となる。直径3.76mを測る円形を呈しているものと考えられる。検出面からの床面の深さは15cmと浅く、床面は堅緻ではなかった。壁際溝は一部南東側に認められたものの全周していない。住居内中央には径約70cm、床面からの深さ14cmの規模をもつ摺り鉢状に掘込まれた炉が設置されている。埋土は主に炭化物で、遺物の出土はわずかに土器破片（35）1点である。住居内には4基のピットが穿たれていたが、そのうちP1とP2がおそらく支柱穴となろう。

出入口相当施設は調査区内では確認できなかった。

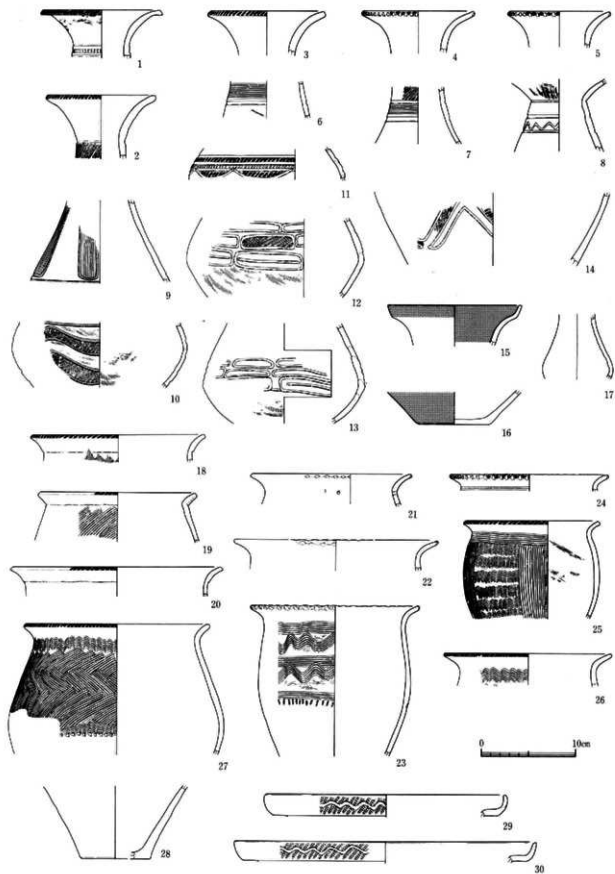
出土遺物量は多かったがほとんど破片資料である。図示した土器は栗林様式の壺（1～17）、甕（18～30）、赤色塗彩の鉢（31・32）のほか、拓影として壺（36～52）、甕（53～68）がある。このほか、土器片転用の円板状有孔土製品（34）と打製の刃器（33）が出土している。



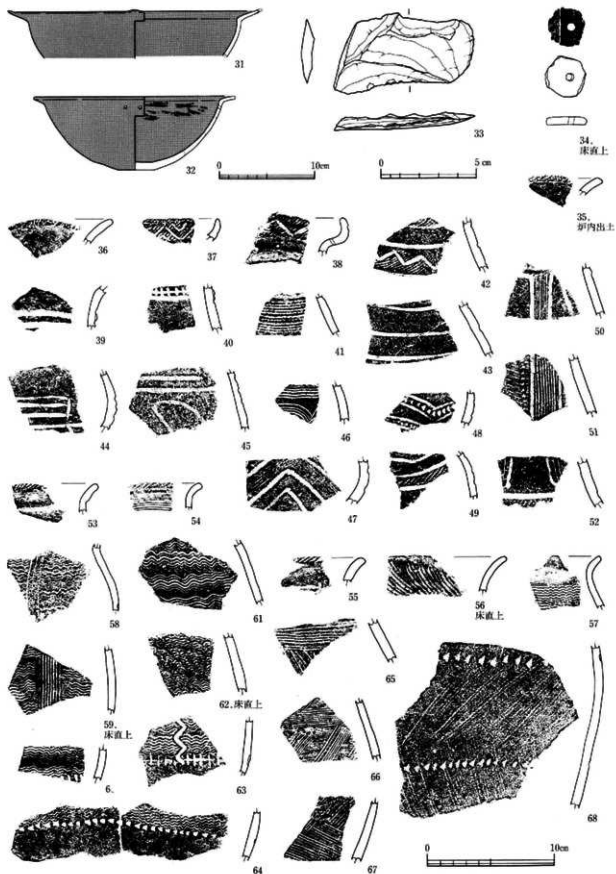
第34図 SA8実測図 (Scale=1/80)



写真44 SA8（北から）



第35图 SA 8 出土土器实测图 (Scale=1/4)



第36图 SA 8 出土遺物実測図 (Scale=1/3, 31・32はS=1/4, 33はS=1/2)

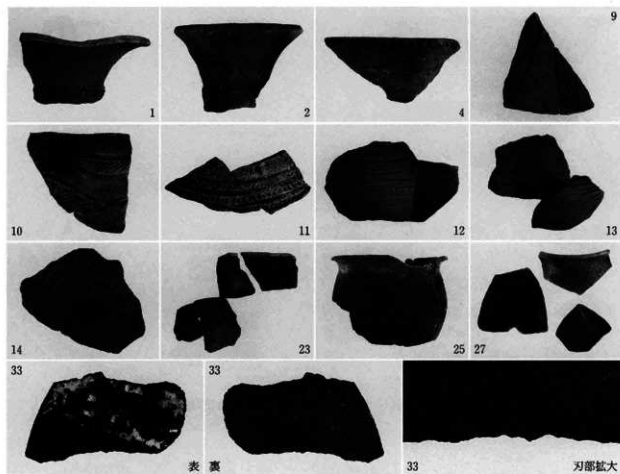


写真45 SA8出土遺物

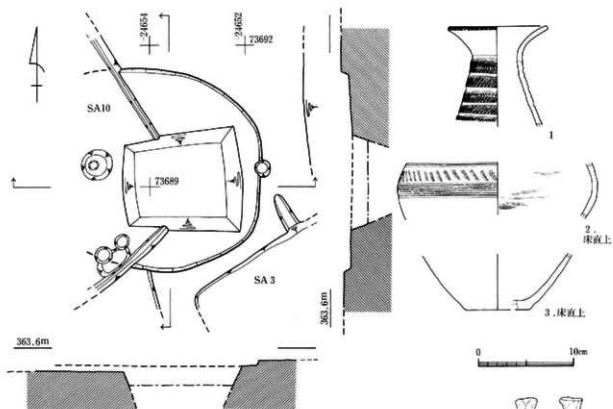
B区SA9

弥生時代後期のSA10に約1/2切られ、さらに試掘坑が住居中心を大きく貫通してしまい、わずかにその一部が残っているにすぎない。円形プランであることと堅緻ではないものの床面の存在、若干の出土土器から、おそらく直径約4.3mの円形を呈する竪穴住居跡と考えられる。しかし炉はおろか柱穴すら残っていないため、詳細を知ることはできない。検出面からの床面の深さは16cmと浅く、出土遺物量は少ない。実測図には純粋な遺構出土遺物(2~4、17、18、20)の6点に加え、SA10の覆土に混入した該期の土器破片を、本住居跡と重複している部分に限って抜き出した。したがって上記6点以外は本遺構に帰属しない可能性も残される。

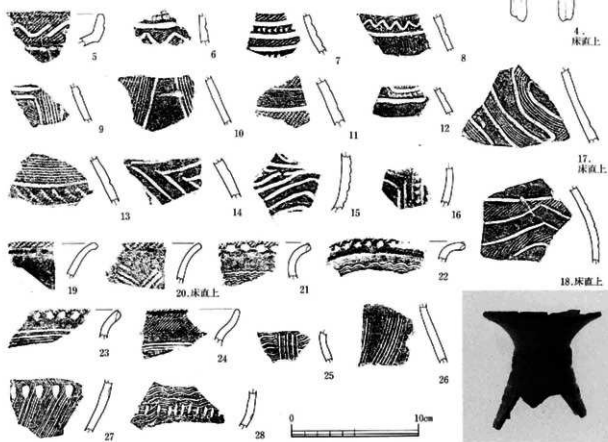
図示した遺物には、粟林期の壺(1~3、5~18)、甕(19~28)のほか、用途不明な土製品(4)がある。



写真46 SA9(西から)



第37图 SA 9 实测图 (Scale=1/80)



第38图 SA 9 出土器物实测图 (Scale=1/4, 4~28はS=1/3)

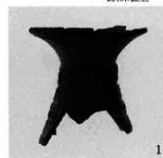


写真47 SA 9 出土土器

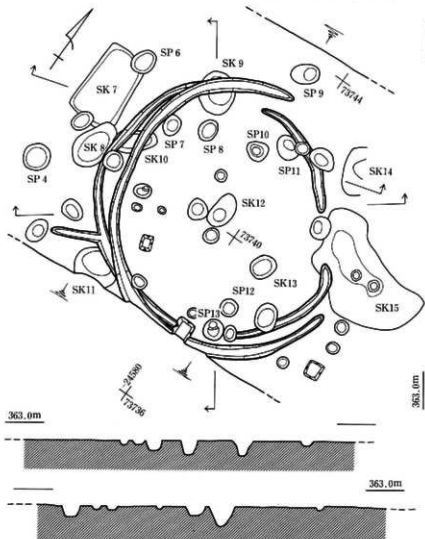
2 環状溝跡

A区SC1

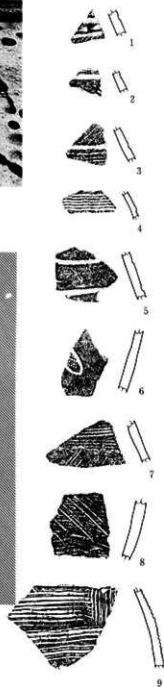
平地住居跡と考えられる環状溝跡は、A区のほぼ中央にて検出した。削平が著しいが、検出作業は人力で掘り下げた部分であり、重機による削りすぎの可能性はない。溝跡は大きく2条からなり、上位の溝は長径約5.7m、短径約4.8mを測る楕円形のC字形を呈する。下位の溝も長径約5.3m、短径約4.7mを測る楕円形で、検出面では全周しない。溝内側には土坑が多く穿たれているが、該期と考えられるものは少ない。松原遺跡などにみられる出入口相当施設と中心の焼土塊は本遺構では確認できなかった。溝覆土からは該期の土器破片少量が出土している。



写真48 SC1 (北から)



第39図 SC1実測図 (Scale=1/80)



第40図 SC1
出土土器実測図
(Scale=1/3)

第8節 縄文時代後期の遺構と遺物

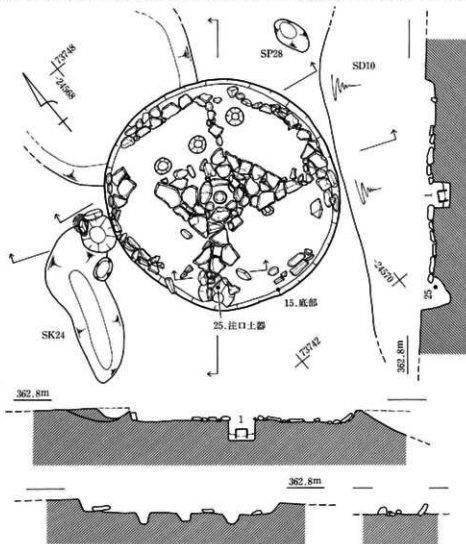
該期の遺構は、A区の東側に多く分布している。またB区の2次面もおそらく該期と推測されるが、出土遺物も極少のため積極的な根拠ではない。

1 敷石住居跡

A区 SA13

A区東側に検出した直径3.7mの円形を呈する竪穴住居跡である。検出面からの床面の深さは最大18cmで、重機による遺構面設定作業において、若干の敷石の移動、抜き取りがあるかもしれない。敷石は壁際と中央部にみられ、とくに中央部では菱形に敷き詰められている。敷石の存在しない範囲が4箇所認められ、これらのことから4枚のスノコ状の板材を敷いていた住居と考えられる。想定される板材の規模は北東の第1範囲が124cm×74cm、南東の第2範囲が153cm×75cm、北西の第3範囲が141cm×72cm、南西の第4範囲が134cm×74cmである。管見によるかぎり3枚の敷き板が想定される敷石状態が普通であり、4枚のものはきわめて稀な存在である。

炉は住居中心の敷石の中央に設置される石囲炉で、内径42cm、床面からの深さ32cmを測る。内部



第41図 SA13実測図 (Scale=1/60)



写真49 SA13 (南西から)



写真50 SA13 (北東から)



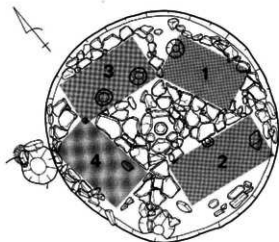
写真51 SA13 (北西から)

に底部を欠いた深鉢形土器(1)を埋め込んであり、土器の内部には、炭化物が入っていた。

出入口とした住居内南西の土坑は径56cmの摺り鉢状を呈し、その埋土からは注口土器(25)が出土した。この土坑の北東には敷石の上面レベルよりも明らかに高くした立石2個があった。

柱穴らしき土坑が4基穿たれているが、敷板部分となる位置関係や深さなどから考えても、柱穴かどうか不明であり、別遺構の可能性が考えられる。

住居の北西外側に接して径60cm、深さ16cmの土坑(隣接土坑)が1基ある。当初出入口に相当する施設かとも考えたが、敷石の状況から別遺構とした。2個の石材とその周囲の焼土など明らかに特殊な土坑であり、土器(83)が出土している。本住居にともなうものかどうかわからない。出土遺物については、第IV章を参照されたい。



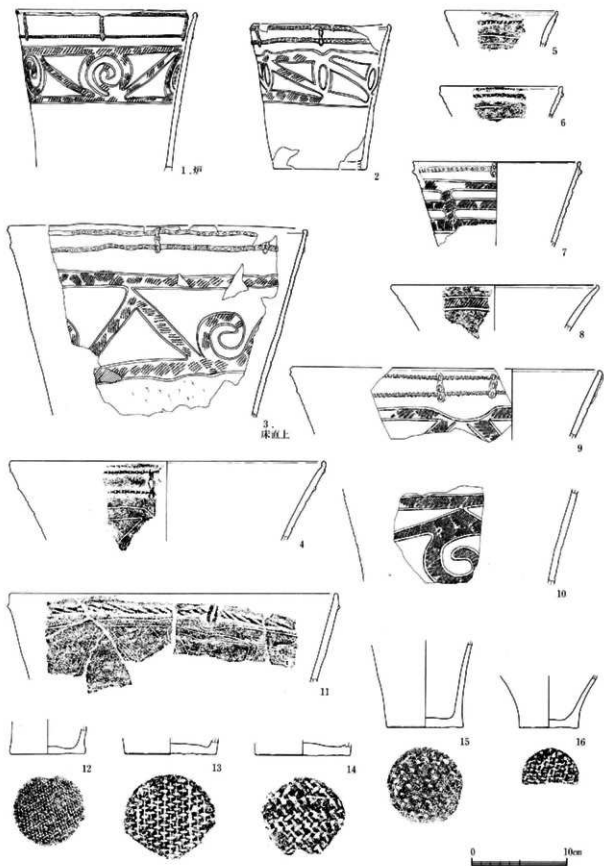
第42図 SA13敷板想定図 (Scale=1/60)



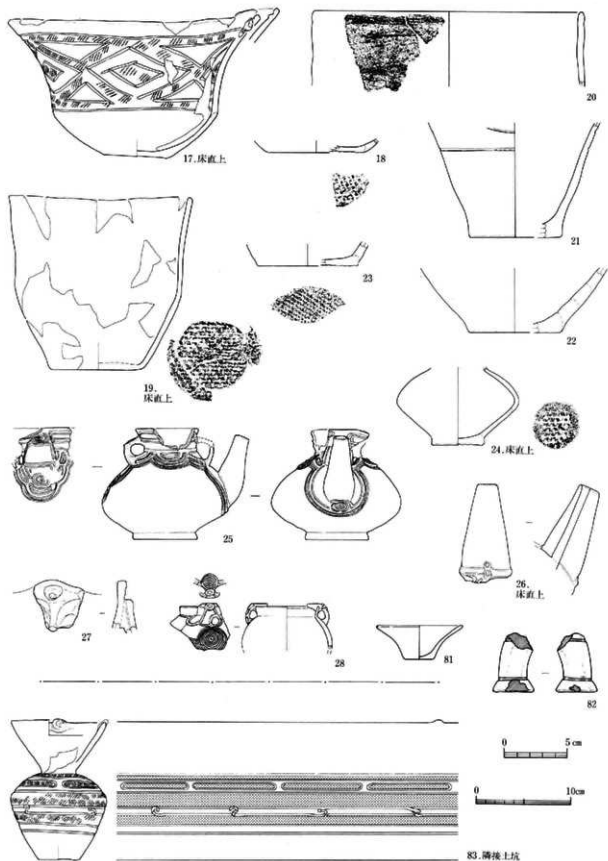
写真52 SA13坪 (南西から)



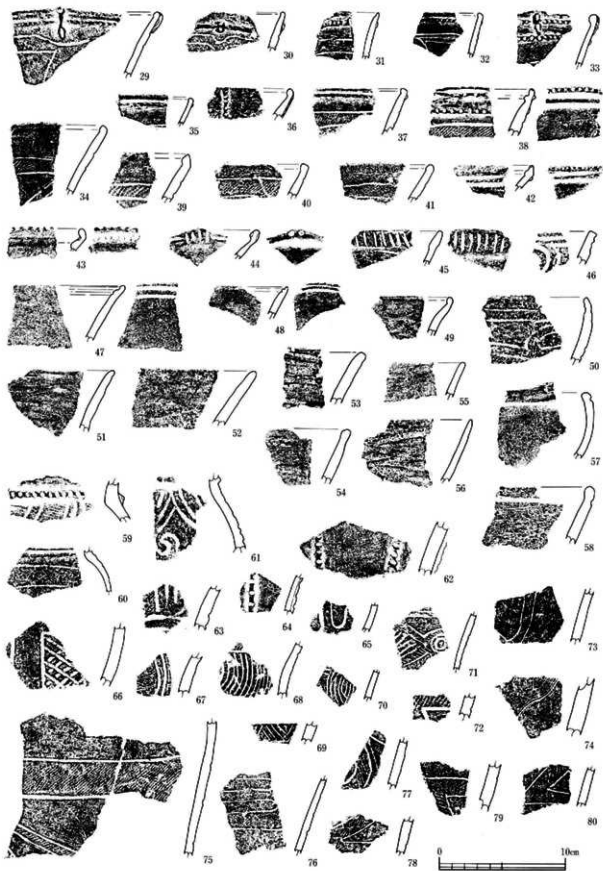
写真53 SA13が半割



第43图 SA13出土土器实测图 (Scale=1/4)



第44図 S A13出土遺物実測図 (Scale=1/4、81・82のみS=1/3)



第45图 SA 13出土土器拓影 (Scale=1/3)

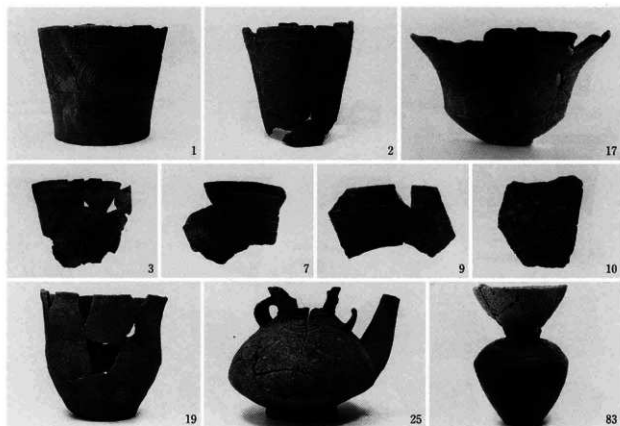


写真54 SA13出土土器

2 環列土坑群

B区第2次遺構検出面において検出した土坑群のなかで、本遺構のみ円形配列を意識していると考えられたことから、何らかの建物遺構として抽出した。あるいは削平された竪穴住居跡の痕跡かもしれない。直径約2.3mのほぼ同心円状に配された土坑は南東の1基のみ規模が大きい。規模や深さ、掘り込まれ方などから、対角線上に類似の土坑が配されている。出土物は皆無で積極的に時期判定できる根拠はないが、弥生時代中期の遺構が存在する第1次遺構検出面よりも下層であるという消極的な理由から該期とした。

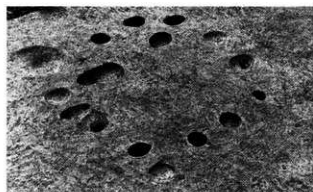
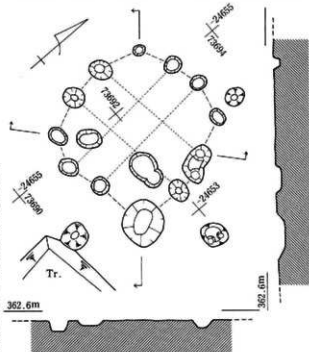


写真55 環列土坑群 (北から)



第46図 環列土坑群実測図 (Scale=1/60)

3 集石土坑

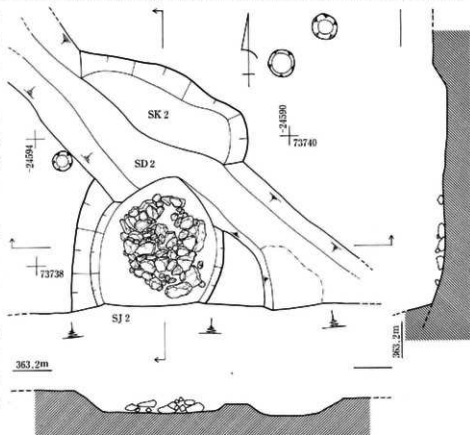
A区SJ2 (SK2, SD2)

A区西側にて検出した遺構であるが、SD2あるいはSK2と切り合い関係にあり、遺構の掘り形が明確に判別できず、平面プランは不確定である。SD2を挟んだ位置となるSK2とは同一遺構である可能性すら考えられる。覆土はいずれも単層の砂礫層で目視による判別ができず、切り合い関係を明確にできなかった。したがってSJ2、SK2、SD2それぞれの前後関係は不明である。またそれぞれの出土遺物も混入関係にあり、明確には区分できなかった。

SJ2は直径約2.4mの円形を呈する土坑で、検出面からの深さは38cmを測る。中央部には直径約1.3mの円形状に集石がみられる。集石の主要石材は幼児頭大の川原石であるが、拳から枕大の大きさや角石などもある。現状では円形に見えるが、北西～南東方向の主軸をもつ組合せ式の石棺が崩壊した状態と考えることもできよう。集石上部より多量の土器片が出土し、骨片も少量出土したことから、石棺墓となる可能性は否定できない。

SK2はSJ2と同一遺構である可能性と、SD2と同一である可能性が考えられる。

SD2は北西～南東方向に延びる溝跡で、北西側ではSK3と切り合い、古墳時代後期前半のSA1に切られている。



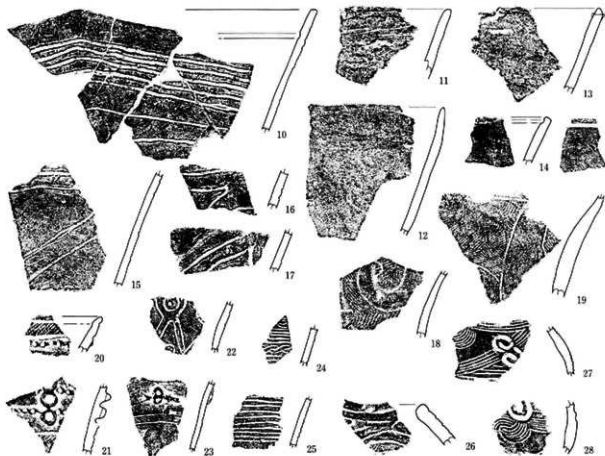
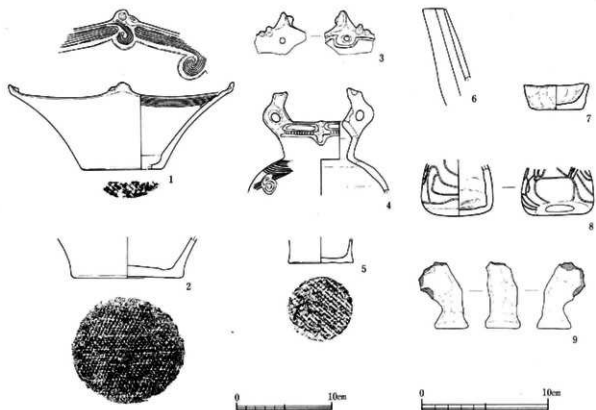
第47図 SJ2・SK2実測図 (Scale=1/60)



写真56 SJ2 (北東から)



写真57 SJ2集石 (東から)



第48图 S J 2 出土遺物実測図 (Scale=1/4, 7~28はScale=1/3)

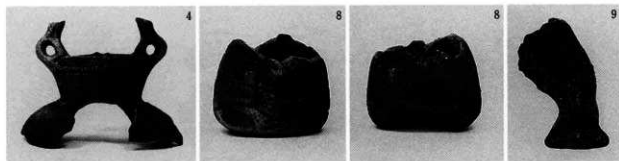
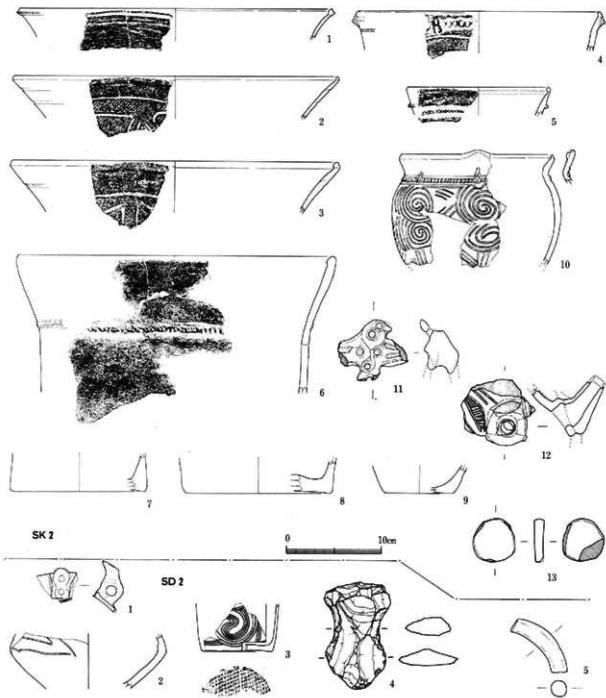
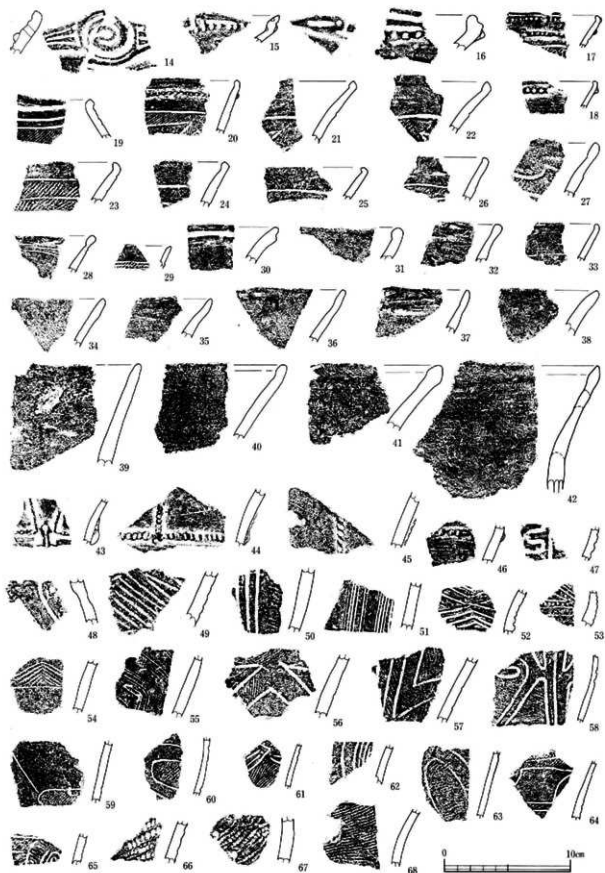


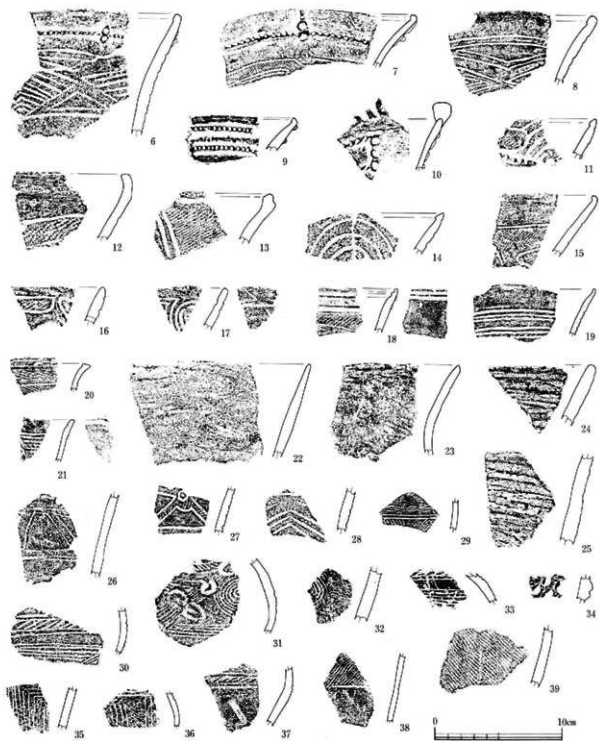
写真58 S J 2出土土器



第49図 SK 2・SD 2出土遺物実測図 (Scale=1/4、SK 2・13とSD 2・4はS=1/3)



第50图 SK 2出土土器拓影 (Scale=1/3)



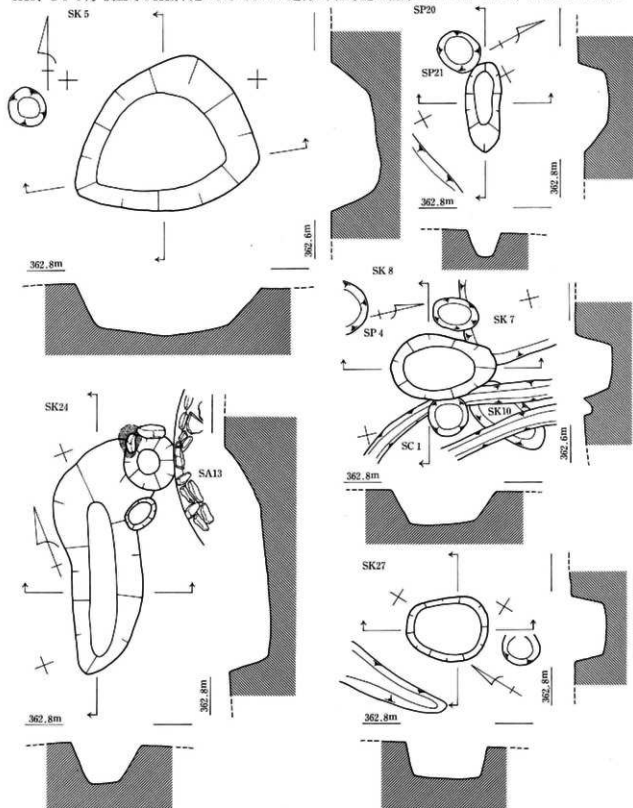
第51图 SD 2出土土器拓影 (Scale=1/3)



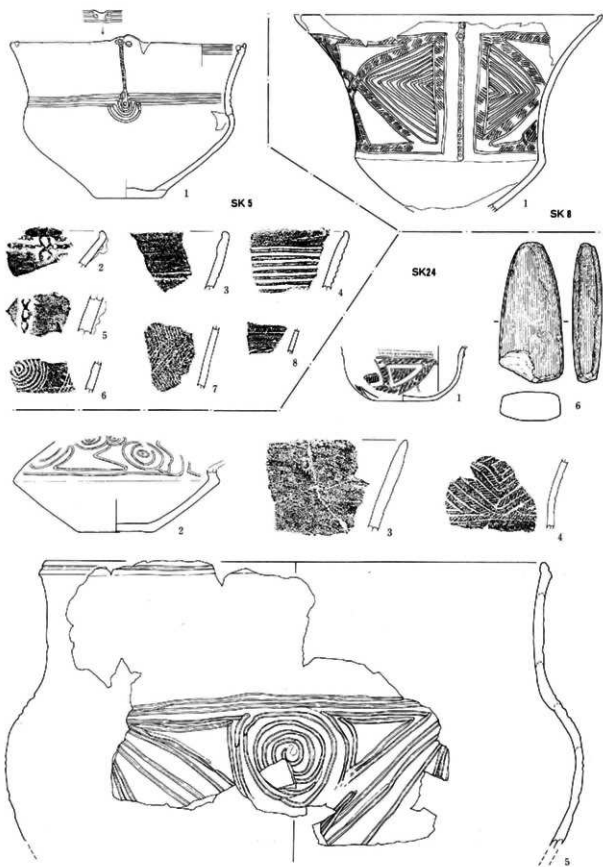
写真59 SD 2出土遺物

4 土坑

A区にて検出した土坑のうち、図化できる土器が出土した土坑・小穴5基（SK5、SK8、SK24、SK27、SP20）を抽出した。さらに6基の土坑・小穴については拓影図化した（SK3、SK9、SK13、SK23、SK28、SP3）。調査時の認識不足によりそれぞれ遺物の出土状態を記録していなかったため、いわゆる土器被り

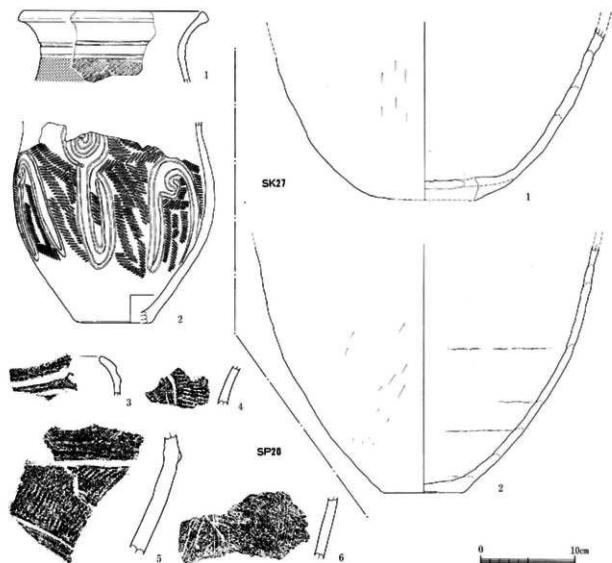


第52図 A区土坑実測図 (Scale=1/40)



第53図 土坑出土遺物実測図 (Scale=1/4, SK 5 拓影のみ S=1/3)

等の確認ができない状態である。特にSK5・8・27は土器の出土状態如何によっては土墳墓となる可能性が考えられるが、現状では追認することができない。またSK24は敷石住居であるSA13と接しており、住居と密接に関連する施設である可能性も考えられる。A区にて検出している土坑・小穴108基のうち、土墳墓となる可能性を有しているものは相当数あるものと考えられる。B区2次面にて検出した119基の土坑・小穴からは、遺物の出土はほとんどなかった。



第54図 土坑出土遺物実測図② (Scale=1/4、拓影のみS=1/3)



写真60 土坑出土土器①

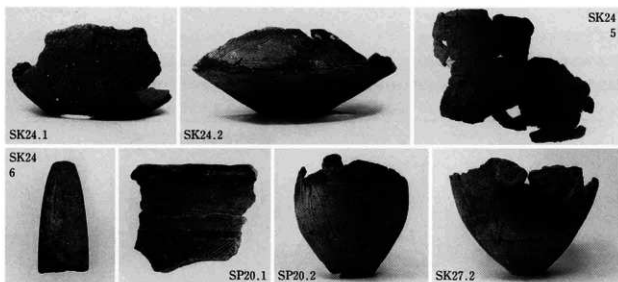
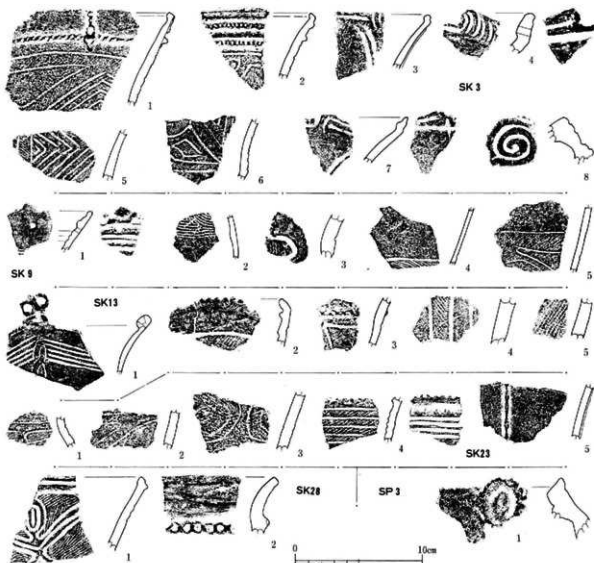


写真61 土坑出土遺物②

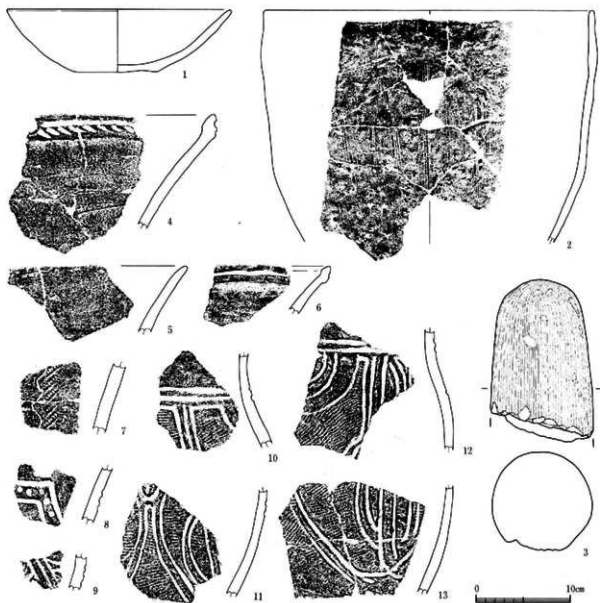


第55図 その他の土坑出土土器拓影 (Scale=1/3)

5 溝跡

A区SD10

A区における該期と考えられる溝跡は、SD2とSD10の2条である。SD10は幅約3m、検出面からの深さ約60cmを測り、北東～南西方向に流路をもつ。遺物の出土はそれほど多くない。



第56図 SD10出土遺物実測図 (Scale=1/4, 4~13はS=1/3)

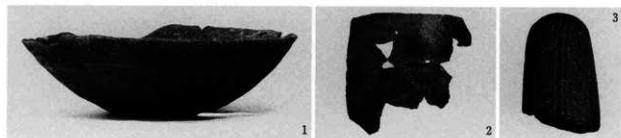
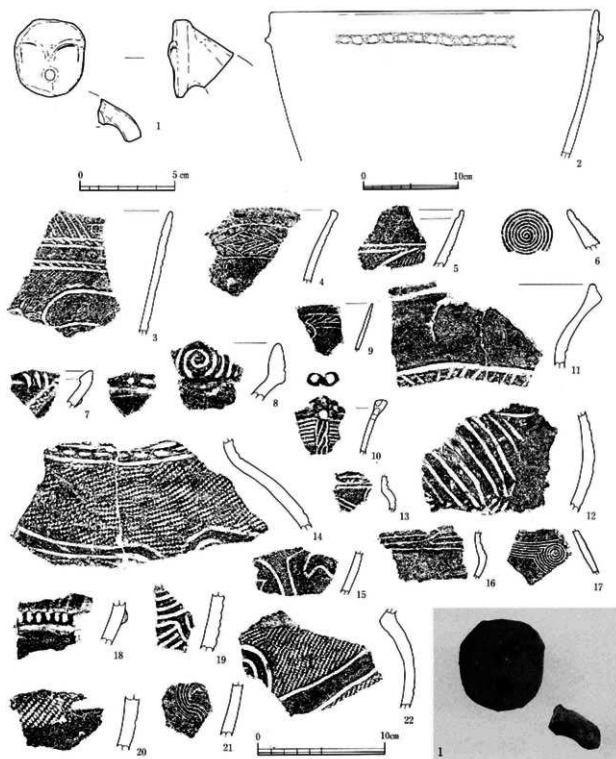


写真62 SD10出土遺物

6 A区検出面

A区における検出作業時、および東側の人力による包含層除去作業時に出土した遺物から該期の所産と考えられるものを抜き出した。A区でも西側では古墳時代の遺物が多く出土し、中央辺りでは弥生時代の土器片が混じり、東側では該期の遺物が多い傾向にある。B区1次面からの出土遺物は弥生時代中期から奈良時代までの土器片であり、2次面からの出土遺物は皆無に等しい。



第57図 A区検出面出土遺物実測図

写真63 検出面出土土偶

7 その他の石器

本節にて記載した遺構出土の石器・石製品以外で、検出面や包含層、明らかな他時期遺構への混入品17点を図化した。弥生時代の石器が含まれている可能性は多分にある。打製石鏃は未製品を含め6点で、1は黒曜石製の凹基無茎、2は未製品、3は平基有茎、4は凸基有茎、5は平基無茎、6は凸基無茎の大型品である。7・8は石鏃、9～11は打製石斧で、11は瓢形を呈する。12～14は磨製石斧、15は砥石かあるいはすり石、16は石剣状の不明石製品、17は凹石である。このほかA区SD2から打製石斧【第49図、4】が、A区SK24から磨製石斧【第53図、6】が、A区SD10から石棒状の不明石製品【第56図、3】が出土している。また弥生時代後期のSJ1から出土した打製石斧も該期からの混入品と考えられる。

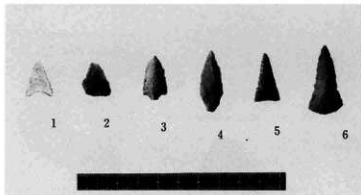


写真64 石鏃

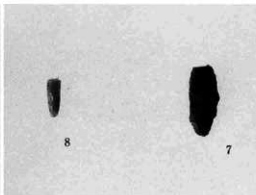


写真65 石鏃

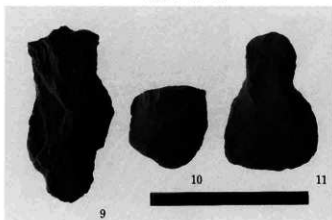


写真66 打製石斧

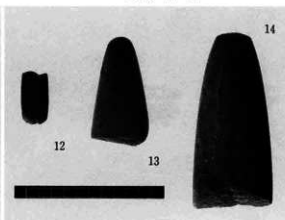


写真67 磨製石斧

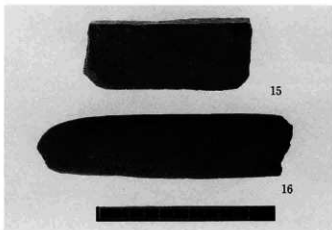
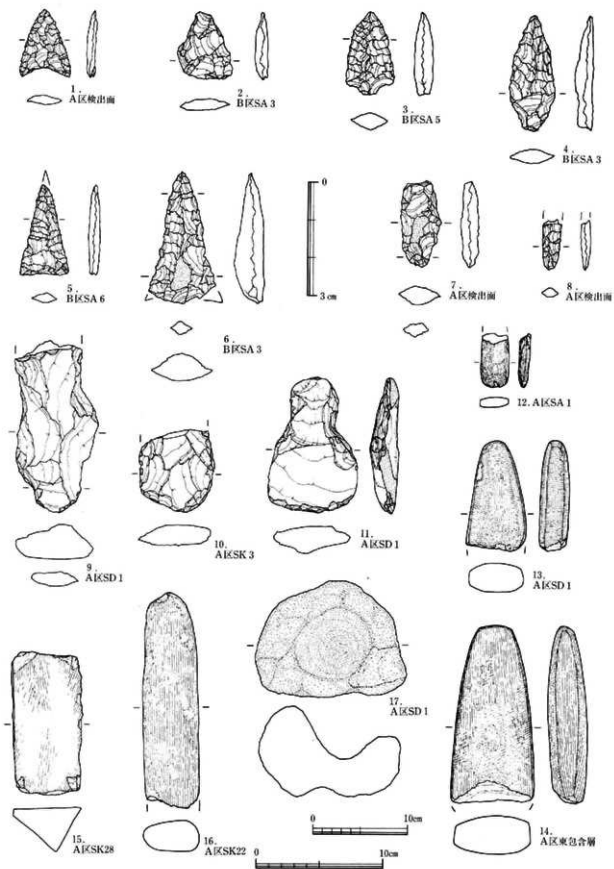


写真68 石製品



写真69 凹石



第58図 その他の遺構出土石器実測図 (Scale=1/1, 9~16は1/3, 17は1/4)

第Ⅳ章 考 察

第Ⅰ節 縄文土器について

前章第8節に報告された縄文後期の遺物のうち、ここでは主として土器の編年位置を確認したい。おそらく出土土器の8割以上は堀之内2式に属するものであろう。これに先行する堀之内1式期と、後続の加曾利B1式期の土器が残り占めている。これを編年の順に第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群とする。資料の充実している第Ⅱ群についてはS A 13出土資料の説明どおり6類に分類して多少詳述し、他の遺構出土資料に関する記述はなるべく省略することとする。図示した資料もすべてを実現したわけではないので誤認の恐れもあり、記述を避けたものがあることを断っておく。

Ⅰ 敷石住居跡A区S A 13 (第43図1~16、第44図17~28・81~83、第45図29~80)

縄文時代では唯一の住居跡である。完形品を含む第Ⅱ群：堀之内2式期の多量の土器を出土した。器形には、第1類：いわゆる朝顔形深鉢(1~11など)、第2類：胴下半の屈曲部が文様帯下端区画となる鉢(17)、第3類：口縁部が無文、くびれ部以下の丸みのある胴部が文様施文部となる深鉢(59~62など)、第4類：第2類以外の鉢あるいは浅鉢(47・48・50・57・81など)、第5類：注口土器(24~26・28)、そのほかに第6類：粗製土器(19・20など)がある。

第1類(1~16・29~35・37~42・68~72・75~80) 有文土器では最も多量に出土した。口唇部は短く内屈して内面が丸く肥厚する。口縁部に1条(5~7・29~32・35・37・42)、または2条(1~4・9・33・38)の刻みを施す細い隆帯がめぐり、8字状貼付文を伴う。隆帯のない例も見られるが(8・34・39~41)、これらは第2類と区別できない。胴上半部に磨消縄文(充塞縄文)で描出した各種の意匠がめぐる。

1・3・10は渦巻文を描く。1は貼付文の下に上下の帯縄文に接して渦巻文を配し、斜行文が隣の単位に連続する。斜行文は右下がり・右上がり交互となる。3は三角文の中に渦巻文を配し、下向きの三角形頂部から区画の中途まで巻き上がる。10も1のような斜行文を伴うが、天地が判然としない。7も渦巻文であろう。11は三角文を描くものである。4・9・29・34・75・78~80など、3または11と類似の文様と推定される。2は貼付文下に小ぶりな対弧文を配し、右下がりの斜行文が隣の単位につながる。7は2段の棒状文である。胴部破片76も同じ。71は菱形文の交点に同心円文を配し、菱形部分に沈線を充塞する。68~70は集合沈線が見られるが、本類に含めてよいか躊躇される。12~16は網代痕をもつ底部である。16は丈の低い器形となろう。

第2類(17) 確実なものは完形に近い17のみである。この類は口縁部に隆帯がめぐることは少なく本例もそのとおりであるが、平口縁の一部分が高まった箇所には8字状貼付文が施される。胴部文様は第1類と共通して整った菱形文がめぐる、菱形を二重に描いて無文部を埋めている。

第3類(36・44・45・59~62・64) 口縁部破片には、外面に沈線がめぐる44と、これがなく刻みを施す隆帯が垂下する36・62・64が見られる。内面にも施文する45は、南三十稻場式にしばしば見られる。胴部は数条の沈線文が縦位に展開する59・61と、横位の帯縄文60がある。

第4類(47・48・50・57・81) 47・48は外反する口縁部で、口唇内面に2条の沈線がめぐる。そのまま底部に至る無文の鉢と推定されるが、第3類の可能性もある。50は内湾気味の器形で、渦巻文に似た文様を描く楕形の鉢であろう。57は口縁部に沈線がめぐり、同様の器形と推定される。81は強く外反する無文の小形浅鉢である。

第5類(24~26・28) 25はほぼ完形の有頸注口土器である。底部を粘土板で高台状に作り、胴下部に最大径をもつ丸みのある器形である。注口部は急角度に上を向き、把手とは離れている。把手とそれに付随する渦巻文、

及び両把手間の肩部には、隆帯に沈線に沿わせた弧状文が連なり、注口部を囲繞する。隆帯内側の凹部と、外側の沈線間には横線な刺突文を施す。頸部には水平に同様の施文を行うが、刺突文は見られない。帯状部に刺突文を施すこの種の文様は注口土器と土偶の文様にしばしば見られるが、深鉢形土器には皆無に近いものである。

24は25と同じ器形の胴部無文の注口土器であろう。28は短い頸部の内面に把手上面が張り出し、胴部に渦巻文を描く。26は器壁の厚い大形の注口器で、基部下面には8字状貼付文がある。

第6類 (19・20・51～56・74) 19は完形に近い小形の無文深鉢である。口縁部は直立に近く、胴下部にゆるい屈曲がある。全体に摩耗し、調整は観察できない。網代底である。20・51～56は単純な形態の口縁部破片である。やや雑なヨコナデか認められる資料が多い。74は条線文を施す深鉢であろう。

27は無文の口縁部に橋状把手が見られ、三十稲場式の鉢形土器と推定される。第1群：堀之内1式かそれ以前の時期である。83は本住居跡の北西壁外に隣接する土坑から出土した壺形土器で、第III群：加曾利B1式の時期に伴うものであろう。最大径は胴部上半にあり、頸部が絞まって無文の口縁部が大きく広がる。平縁の内面に1カ所貼付文がある。胴部には各4段の縄文部と無文部がめぐり、肩部には栴門文を4単位、胴中位の無文部には4種の区切文を配する。

これらの第II群に属する土器の出土状態は、1が石囲炉内に埋設、3・17・19・24・26が床面直上の出土である。27・43・83を除けば大きな時期差を有する資料は見られず、石井寛氏による堀之内2式土器の5細分編年(石井1984)に対照すれば、2b式でも2c式に近い、堀之内2式の半ば頃に位置する良好な一群である。

83のような壺形土器は加曾利B1式にはきわめて稀な器種であり、東北地方北部に多いものである。最も似た資料として福島県須賀川市王子前遺跡例を指摘できるが、福島県でも稀な例である。長野県では縄文後期後半以降、壺・浅鉢・注口土器など小型精製器種の多くが、壺付土器や大洞式諸段階の土器に占められる。本例はそれらに先立つ東北系土器の搬入品の可能性が高く、注目される。

2 集石土坑A区S J 2 (SK 2、SD 2) (第48～51図)

切り合う3者の前後関係が不明で、S J 2とSK 2が同一遺構の可能性があり、遺物も混入していると報告されている。S J 2の出土遺物(第48図1～28)には、第1群か称名寺式にさかのぼる18・19が混じる他は、第II・III群である。1は外面無文の浅鉢で、4単位の波頂部に8字形を半ひねりしたような突起が付き、口縁部内面に沈線帯をめぐらす。内面の底部付近に稜をもつ。24はいわゆる石神類型の深鉢で、沈線帯と連鎖状沈線を施す。1・24は堀之内2式でも新しい段階に現れ、SA13の第II群土器より後出である。4・27・28は第III群の注口土器である。10は波状口縁に沿って沈線帯がめぐる深鉢で、この時期の半精製土器である。

SK 2の遺物(第49図1～13、第50図14～68)には、11・27・48や縄文施文土器66・67など古そうなのも若干見られるが、大部分はSA13と同時期の第II群である。第3類に属す10は第1群の終末か第II群の古い時期に位置するのであろう。6は第6類に属すが、刻みを施す隆帯がめぐる。この種の粗製土器は長野県では称名寺式後半から現れ、第I群に伴うが、第II群まで継続するかは明確でない。

SD 2の遺物(第49図1～5、第51図6～39)には、第1群かそれ以前の三十稲場式34、第III群の注口土器1・29～31・33・37ある。その他は第II群であるが、3・19～21は石神類型である。5は注口土器の弦部分であろうか。図化資料を見る限り、SK 2はおおよそ第II群でまとまるが、S J 2とSD 2は前後の時期の資料が混じり、S J 2はSA13より後出の可能性もある。

3 土坑SK 5・8・24・27、SP 20、SK 3・9・13・23・28、SP 3 (第53～55図)

SK 5出土(第53図1～8)の1はほぼ完形の第II群第3類の鉢である。口径に対して器高が低く、胴部は無文である。口縁内面に沈線3条がめぐる。1単位の有孔小突起から刻みを施す隆帯が頸部まで垂下し、8字状貼

付文で下端を止める。この部分には沈線3条がめぐり、SK8出土の第53図1は第II群第2類の鉢で、半分以上が遺存する。口縁部の8字状貼付文から刻みを施す隆帯が垂下して器面を2分割し、第1類に見られるX字状斜行文に似た意匠を描く。沈線を充填した横向きの三角文の間(図の側面部分)には横位の紡錘文を配し、この上下には対向する三角文を描く。長野県では縄文後期前・中葉に、甕被葬を伴う土坑墓や石棺墓が見られ、専らこの種の土器を用いるが、2点とも出土状態は明らかでないという。松ノ木田遺跡13号土壇では堀之内1式期の浅鉢が逆位で出土しているが、甕被葬の可能性はある。

SK24出土(第53図1~5)の5は第II群第3類に先行する第I群の新しい段階の土器である。縄文はなく、太い沈線を多重化して渦巻文を描き、斜行文がこれを囲んでいる。その他は第II群であり、1は胴部に渦巻文を描く第3類、2は胴部がそろばん玉形の第5類注口土器である。

SK27出土の第54図1・2はいずれも無文土器の底部で、時期は明らかでない。SP20出土土器(第54図1~6)はいずれも第I群であろう。1・2は第II群第3類と同じ形態の深鉢である。2は小渦巻文から垂下する無文部で描出されたU字・逆U字状の意匠が、それぞれ独立して配される。

SK3出土土器(第55図1~8)は、SA13と並行期の第II群である。SK9出土(第55図1~5)の1は内面文のある浅鉢、2は注口土器で、いずれも第II群の新しい段階、3は第II群であろうか。SK13出土(第55図1~5)の1は石神類型、2は第III群の浅鉢、3は第II群である。SK23出土(第55図1~5)の4は第III群の深鉢、その他は第II群である。SK28出土(第55図1・2)の2は外反する短い無文口縁の下に押圧を施す隆帯がめぐり、三十稲場式の可能性がある。1は第I群段階の第2類である。

4 溝跡A区SD10(第56図1~13)

4・6・10~13は第II群第3類の古い段階か、第I群に属するものである。10~13は同一個体らしく、径に対して丈が高い器形である。幅狭の無文部で紡錘状の意匠を描出するが、下端は閉じている。1は無文浅鉢、2は条線文を施す粗製深鉢である。8は称名寺2式であろう。

5 A区検出面(第57図1~22)

8・11・12・14・22は第I群に属するであろう。頸部無文の深鉢14・22は無文部で渦巻文を描出し、11・12は集合沈線を充填する。3~6・10・16・17は第II群である。第1類の3は口縁部に文様を描き、本来は刻みを施す隆帯が沈線による表現となっている。胴部文様は杵状文らしい。4は幅の狭い横位区画内に菱形文を描く。第2類の16は文様帯の下端区画が横長のJ字状文である。6・17は第5類、10は石神類型である。押圧を施す隆帯がめぐり無文粗製土器2は、第I群か称名寺式の15などの時期であろう。

第2節 敷石住居跡SA13について

敷石住居跡SA13は主体部が円形を呈し、石囲が周辺に菱形に平石を敷設し、壁際の敷石との間に4カ所無敷石の長方形空間がある。この空間の長辺がほぼ直線的なことから、無敷石部には板材の敷設が推定されている。このような敷石所の無敷石の空間を残す敷石住居跡は、長野県・山梨県で分布が知られている。藤原功一氏は、敷石の敷設状況から間仕切りを推測できる事例に注目し、敷石住居の床面デザインから室内空間構造を検討している(藤原2000)。同氏は敷石面の礫の敷設状況や無敷石部の存在等から、床面デザインを9種に類型化した。この中で、本遺跡のように敷石所の無敷石部を有する例について、敷石部が扇形のを「村東山手類型」、逆三角形のを「岩下類型」、菱形のを「別当西類型」、十字形のを「塩瀬下原類型」と称し、無敷石面は土間として利用するほか、敷物や板、立体的な構造物の存在を推定している。この論考をもとに各種の事例と本遺跡例を比較してみた。

上田市八千原遺跡C地区第9号住居跡 主体部が長径2.35mの円形で、壁外に柱穴がめぐっている。出入口部が想定される南側に堰石状に埋め込まれた石が見られるが、張出部は確認されていない。敷石は石囲炉の周囲に三角形に敷設され、3辺は直線的である。壁際にはほとんど敷石が認められないが、三角形の頂点が接する部分には扁平の河原石を立てている。炉には口縁部を欠損した土器が埋設され、時期は堀之内1式の新しい段階から2式の古い段階である。

望月町平石遺跡15号住居跡 ほぼ円形の主体部の主軸長2.75m、副軸長4.00m、張出部先端までは約5.6mを測る。壁外に柱穴がめぐっている。主体部の敷石は石囲炉周囲にはほぼ菱形に敷設されているが、東半部は配置が不整形である。主体部の前面に配石があり、張出部の側面は礫が2～3段に積まれている。時期は堀之内2式の古い段階である。

小諸市岩下遺跡15号窪穴住居跡 斜面を掘削して造成された半円形の平坦部の縁に、3軒の住居跡が並んでいる。広場の縁には石瓦状に積み上げた石列がめぐり、各住居跡の出入口部はこの石列に接して平坦面になる。主体部は円形を呈し、副軸長4.04m、主軸長3.50m前後を測る。推定される張出部先端までは5.79mとなる。主体部は外縁に高さ5cm前後のテラスを残し、この部分に柱穴がめぐり、テラスの内側に縁石を配し、石囲炉の周囲に大形の平石（鉄平石）を三角形に敷設して、3カ所の長方形空間を残す。遺物は少量であるが、住居跡の廃棄時期は堀之内2式期とされる。

富士見町徳久利遺跡7号住居跡 主体部が径4mの円形で、張出部は確認されていない。出入口部は斜面の下側にあって壁の立ち上がりがない南壁と推定される。石囲炉を中心に小石塊が十字状に敷き並べられてあり、壁からやや離れて石列が空間部を囲む。全体が田の字形の配置となり、空間部の形はやや整然さに欠ける方形である。敷石は面的に広がらず間仕切りとしての性格が強いが、仮に空間部が板敷きとすれば隙間の目地を埋めたように見受けられる。時期は堀之内2式の中段階である。

山梨県長坂町別当西遺跡1区2号住居跡 主軸長7.5mの柄鏡形敷石住居跡。主体部の敷石は石囲炉周囲に菱形に敷設し、これを円形に囲む配石がある。さらに外周には隅丸方形に周境礫がめぐっている。時期は堀之内2式の古い段階である。

山梨県大月市塩瀬下原遺跡1号住居 縄文後期の大型の敷石住居であり、その概要は「居住部は直径7mの円形で、3×3mほどの不整形な柄がつく柄鏡形敷石住居が最初に作られ、その後、その上に、直径約8m×短径約7.5mの配石遺構を作り直したのではないかと考えられる」とされている。主体部には炉を中心に整然とした十字状の敷石を敷設している。環礫方形配石を伴い、壁面に石積みがあり、出入口部に立石を備えている。時期は堀之内2式期とされている。

以上の諸例は、八千原・岩下例が岩下類型、平石・別当西例が別当西類型、徳久利・塩瀬下原例が塩瀬下原類型と整理され、ほとんど堀之内2式の時間幅の中で継起している。炉周辺に菱形の敷石を敷設して空間4カ所を残す本遺跡例は別当西類型に該当する。先の2例に比較すれば張出部が見られない点が異なり、敷石が極めて整った敷設で、壁際にも直線的な敷石を配って長方形空間を区画している点が特徴となる。時間的には若干後出である。張出部については、この時期の遺存状態のよい住居跡の例から推定して、本来は若干高いレベルに存在していたと考えられる。さらに平石例の主体部の壁外柱穴、別当西例の周境礫の存在から、これらが伴っていた可能性もある。

無敷石部の長方形空間には敷板が想定されているが、これが遺存した縄文後期の住居跡として長野県では次の2例がある。

明科町町北村遺跡S B555は主体部直径6.0m、主軸長9.6mを測り、張出部のみに敷石を敷設した大型の敷石

住居跡である。主体部中央にある石囲炉を取り囲み、床面に密着して炭化したクリの板材が出土した。加曾利B1式期である。原村大横道上遺跡第7号住居址は、南北5.5mの不整形の掘込みの中に、1辺1.8mの六角形を呈する周溝がめぐり、この中に炭化材が遺存していた。敷石は六角形の区画全面に敷設されず、無敷石部は直線的に途切れている。この空間部には掘込み面に密着して数本の炭化材が一定方向を向いて残存していた。炭化材の観察から、割材を敷いていたことが推定されている。掘込み面に密着して焼土中から人骨が出土した。時期は堀之内式とされている。不確実な例として、伊那市百駄刈遺跡1号住居址がある。5.10×4.80mの円形竪穴住居跡で、床が全体に焼けて炭化材が堆積している。4本の柱穴を結ぶ方向に炭化材が分布し、中には板状のものもある。板を敷いたという所見はないが、可能性は低くないであろう。堀之内1式から2式期である。

少数例ではあるが、床面に板を敷設した住居跡は、堀之内式期に属し、先の敷石住居諸類型の時期にはほぼ並行している。本遺跡例も大横道上の確実な例から、方形の無敷石空間部に敷板が存在した可能性は極めて高い。また敷石を敷設しない竪穴住居でも、北村例から炉周囲に敷板が存在した場合や、百駄刈例が板敷きとすれば炉から離れた部分に板を敷設する場合があったことが推定される。

敷石住居は、縄文中期後葉から後期中葉にかけて、中部・関東地方を中心に行われ、長野県は最も早く出現する地域の一つであり事例も多い。縄文後期前葉は、検出される住居跡のほとんどすべてが敷石を備えた盛行期に当たるが、堀之内式期は「核家屋」の出現など質的な変化が現れる画期である。当該時期及び地域史研究の上で本遺跡の調査から得られる成果は多大であろう。拙文がわずかでも今後の研究に寄与するところがあれば、望外の喜びとしたい。貴重な発掘資料の調査の機会を与えられた、飯島哲也氏ら長野市埋蔵文化財センターの皆様へ御礼申し上げ、擧筆する。

(綿田弘実)

引用・参考文献 (編著者名五十音順)

- 阿部 俊夫 1989「王子前遺跡」『母郷地区遺跡発掘調査報告書26』福島県教育委員会
- 宇賀神誠司 2000「岩下遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19-小諸市内3-』長野県埋蔵文化財センター (以下「埋理文」と略記)
- 神奈川県立埋蔵文化財センター他 1997「パネルディスカッション敷石住居の謎に迫る 記録集」
- 棚原 功一 2000「敷石住居の居住空間」『山梨県考古学協会誌』11
- 久保田敦子 1991「林之郷・八千原」上田市教育委員会
- 小宮山 隆 1997「別当西遺跡」長坂町教育委員会
- 末木 健 2000「縄文時代石積みについて(子察)―山梨県塩瀬下原遺跡の敷石住居復原―」『山梨県考古学協会誌』11
- 千野 浩 1997「浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡II」長野市の埋蔵文化財第82集 長野市教育委員会
- 鶴田 典昭 1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8-長野市内その6-」埋理文
- 平出 一治 1985「大横道上遺跡」『原村誌』上巻
- 平林 彰 1993「中央自動車道長野埋蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡」埋理文
- 福島 邦男 1989「平石遺跡」望月町教育委員会
- 宮沢恒之他 1973「百駄刈遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-伊那市西春近-』長野県教育委員会
- 山梨県埋蔵文化財センター 1999「塩瀬下原遺跡」『年報15 平成10年度』
- 綿田 弘実 1990「長野県の後期前葉縄文土器群」『第3回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 綿田 弘実 1997「縄文土器について」『滝沢遺跡』御代田町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん よしだふるやしきいせき						
書名	浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡						
副書名	北長野駅前B-1地区市街地再開発事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第84集						
編著者名	飯島哲也・綿田弘実						
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 Tel 026-284-0004 Fax 026-284-0106						
発行年月日	1997(平成9)年3月31日						
印刷所	信毎書籍印刷株式会社						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		座標(第Ⅶ系) X = 73740.00 Y = -24580.00	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ヨシダ フルヤシキ 吉田古屋敷 遺跡	ナガノシヤウチイセキグン 長野県長野市吉田 3丁目22-34 他	20201	A-087	経緯度 北緯 36°39'52" 東経 138°13'30"	19951002 ~ 19951128	750 m ²	市街地 再開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
吉田古屋敷 遺跡	集落跡	中世	河川跡・溝跡	2条	陶磁器、内耳土器		
		奈良時代	竪穴住居跡	1軒	土師器、須恵器	銅製丸柄の出土	
		古墳時代 後期後半	竪穴住居跡 土坑、小穴、溝跡など	2軒	土師器、須恵器 (主に7世紀代)		
		古墳時代 後期前半	竪穴住居跡 土坑、小穴、溝跡など	6軒	土師器、須恵器 (主に6世紀代)		
		弥生時代後期	竪穴住居跡 木棺墓跡 土坑、小穴、溝跡など	1軒 1基	箱清水式土器、石器	供献土器のある 木棺墓	
		弥生時代中期	竪穴住居跡 環状溝跡 土坑、小穴、溝跡など	2軒 1基	栗林式土器、石器		
		縄文時代後期	敷石住居跡 環列土坑群 集石土坑 土坑、小穴、溝跡など	1軒 1基 1基	縄文土器、 (堀之内~加曾利B1) 石器・石製品 土偶	4枚の敷板が想定 できる敷石住居	

長野市の埋蔵文化財

1968年	第1集『信濃長原古墳群』	1992年	第42集『田中沖遺跡Ⅱ』
1976年	第2集『浅川西条』	第43集『南宮遺跡』	
1978年	第3集『中村遺跡』	第44集『塩崎遺跡群(7)』	
	第4集『塩崎遺跡群』	第45集『石川条里遺跡(6)』	
1979年	第5集『塩崎遺跡群(2)』	第46集『篠ノ井遺跡群(4)』	
1980年	第6集『三輪遺跡 一付水内坐一元神社遺跡』	第47集『浅川屈状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・稲浜遺跡』(2分冊)	
	第7集『田中沖遺跡』	第48集『小島柳原遺跡群 中伏遺跡Ⅱ』	
	第8集『篠ノ井遺跡群』	1993年	第49集『浅川屈状地遺跡群 三輪遺跡(4)』
	第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳岡遺跡・塩崎遺跡群(3)』	第50集『浅川屈状地遺跡群 本村東沖遺跡』	
1981年	第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』	第51集『松原遺跡Ⅱ』	
	第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』	第52集『田牧岩屋遺跡』	
1982年	第12集『浅川屈状地遺跡群 一牟礼バイパスA・E地点』	第53集『岩崎遺跡』	
1983年	第13集『浅川屈状地遺跡群 廻田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構』	第54集『古町遺跡 浅人塚』	
1984年	第14集『石川条里の遺構(2)・上駒沢遺跡』	第55集『浅川屈状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』	
	第15集『箱清水遺跡(2)』	第56集『上見川遺跡』	
1985年	第16集『石川条里の遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』	第57集『石川条里遺跡(7)』	
1986年	第17集『浅川屈状地遺跡群 一牟礼バイパスB・C・D地点』	第58集『松原遺跡Ⅲ』	
	第18集『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松原一小田井神社地点遺跡』	第59集『史跡 松代藩主高田家墓所』	
1987年	第19集『土口將軍塚古墳 重要遺跡確認緊急調査一』	1994年	第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
	第20集『三輪遺跡(2)』	第61集『栗田城跡(2)』	
	第21集『丹田小学校遺跡』	第62集『浅川屈状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』	
	第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』	第63集『松原遺跡Ⅳ』	
1988年	第23集『横田遺跡群 富上宮遺跡』	第64集『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』	
	第24集『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』	第65集『浅川屈状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡(2)』	
	第25集『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』	第66集『石川条里遺跡(8)』	
	第26集『東善場遺跡』	1995年	第67集『浅川屈状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
	第27集『小柴見城跡』	第68集『栗田城跡(3)』	
	第28集『宮崎遺跡』	第69集『浅川屈状地遺跡群 徳岡本堂原遺跡』	
	第29集『浅川屈状地遺跡群 浅川端遺跡』	第70集『八幡田沖遺跡』	
	第30集『地附山古墳群』	第71集『浅川屈状地遺跡群 ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』	
	第31集『町川田遺跡』	第72集『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』	
1989年	第32集『中条遺跡』	第73集『松代城跡Ⅱ』	
	第33集『鶴前遺跡』	第74集『松代城跡Ⅱ』	
	第34集『石川条里遺跡(4)』	1996年	第75集『浅川屈状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・栗河原遺跡』
	第35集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』	第76集『浅川屈状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中伏遺跡Ⅲ』	
1990年	第36集『犀地遺跡Ⅱ』	第77集『浅川屈状地遺跡群 松ノ木田遺跡』	
	第37集『篠ノ井遺跡群Ⅲ』	第78集『布施塚1号古墳・2号古墳』	
1991年	第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』	第79集『柏尾南遺跡』	
	第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』	1997年	第80集『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅱ』
	第40集『松原遺跡』	第81集『堀花川屈状地遺跡群 若宮南遺跡』	
	第41集『小島柳原遺跡群 中伏遺跡・浅川屈状地遺跡群 押越遺跡・横田遺跡』	第82集『浅川屈状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』	
		第83集『下箕ヶ谷遺跡』	

長野市の埋蔵文化財第84集

浅川屈状地遺跡群

吉田古屋敷遺跡

平成9年3月24日 印刷

平成9年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社